

GM	22.77	+	+0.01%
GR	127	+	
KR	23.52	-	-0.25%
RBN	59.61	+	+0.02%
MWV	30.47	-	-0.62%

時代よ沈め

まだだ。まだあがる。

せわしなく、苺丞は指先をばたばたと動かす。774、773、772、773、769！目の前でぐるぐると回転するように光りながら動く数字を見つめ、指先はいつそうせわしなくもどかしく行きつ戻りつ苛立って握ったマウスの表面を揺れる。

まだだ。まだあがる。

その言葉は思いもよらず口から漏れてこぼれてどこにも届かずに落ちて消える。766、765、762、763、760…… からかい半分のようにずる、ずると値を下げていく画面上の数字を苺丞はしかめ面で眺める。冷めたコーヒーを飲む手は、抑えても抑えても噴露する感情で震えて落ち着かない。

何でそんなにびびってんだよ。

苺丞は画面に向かって悪態をつく、その声は誰もいない冷たい部屋で縮こまり残響は蒸気のように漂う。いつの間にか画面の数字は七百五十五まで値を落としてしまっていた。苺丞は画面を睨みつけながらくやしさと力を込めてマウスを握りしめる。ぎ、ぎ、とマウスはひねり潰される甲虫のような鳴き声を出す。

まだだ。まだあがる。

752、751、752、753、754……

まだだ。まだあがる。

755、754、755、753！ 752、750、747……

目の前の数字が七百五十を切った瞬間に苺丞は我慢の限界を超えてしまい、声にならない息の破裂音のような、水中の窒息した叫びのような音の発現とともに立ち上がり握りしめたマウスを激昂まじりにディスプレイ目がけて投げつける。壊音の礫と一緒にマウスが破散して机と床に残骸がばらばら、からからと落ちた。その後はもうひび割れた画面の無残が目の前にあるばかり。苺丞は馬鹿みたいに大きなため息をついて椅子に座ると興奮して熱くなった額を押さえ今度はひと回り小さくため息をつく。そんな苺丞のことなどもちろん意にも介さずにべもなく、ひび割れた画面の奥で数字は値を下げていく。

再びため息、苺丞は砕け散ったマウスの代わりにキーボードを操作しながら売り注文を出す。七百四十三円まで下がった株価は結局七百五十円まで値を戻し、苺丞はそこで売買を成立させる。七百八十円で千株を買っていたので三万円損したことになる。デイトレードとかスイングトレードと呼ばれるような、つまり一日から一週間程度の短期サイクルの売買で金を稼ぐ株式投資を生業とする苺丞にとってこういう損をするのは珍しいことではない。普段は買って負けても感情を上手く制御して冷静に売買をこなすのだが、今回買った銘柄の株価上昇についてはかなりの自信を持っていたので予想外の下落に取り乱してしまった。気の抜け呆けてだらしないアホ面で見つめるひび割れた画面の奥では、なおも続く無数の投資家たちによる取引の売買成立を示す光の点滅が延々としている。この画面の向こうに、世界中のあらゆる場所から人々が集まり株を売買している。ただ相手にしているのは目の前の数字だけで、どこの誰がどういう境遇で取引に参加しているのかなど考えもしない。ゆりかごの上の演算装置、数字とともに生まれて数字とともに死んでいく。751、749、748、747…… 苺丞は無意味に生氣なく鼻先で見えな

い蝶と戯れるように指先をふよふよと動かしながら今回の売買でいったいどこが間違っていたのかを考える。株の値動き、会社の財務状況、世界経済情勢、投資家たちの心理状態、自らの焦り、あるいは自信過剰。あれこれかれこれ考えるが納得いくような答えは出てこずに頭をかきむしり顔を上げ机を二度三度叩き、再びため息。

画面のわきには子猫の死骸のような食いかけのリンゴが放ったらかしになっていていつの間にかぼつぼつと蟻が群がっていた。苺丞は酸化して茶色くなった果肉から滲み出した汁もろとも蟻を一匹、力ない指先ですくい取る。べたつく指の腹をこすりあわせてその蟻を潰すと果物の腐り始めたような甘い汁のにおいと死酸の刺激臭で鼻の奥がひりひりと痺れた。そこで我に返り、ディスプレイの右上に表示されている時刻を見て苺丞は立ち上がる。株の取引が行われるザラ場の時間がすでに終わっている、そして、今から外へ出て人と会わなければならない。どろりと溶けて滞留する鉛のような憂鬱、正直あまり会いたくない相手なのだが会わないわけにもいかず、苺丞はよれたシャツの上からジャケットを羽織り薄い財布をポケットにねじ込む。身支度を整え、つつ立ったまま手のひらを無精ひげに当ててじゃれるようにさすりながら何かを考え込む。べたつく指先からはまだ同じにおいがして、鼻の奥がひりひりと痺れる。

で？ パソコンの画面ぶっ壊して、そんで新しいの買わないといけないってことか。

うなずく茨丞の目の前、舩治は笑う。ひひ。

つまり、今月分の借金は返せない。そういうことだな？

再びうなずく茨丞の目の前、舩治はさっきより高くて大きな声で笑う。ひひ。ひひ。夕方、客の少ないファミレスの中でその音はよく響いて、大学生のアルバイト店員がくるっと振り向いて首をかしげる。嫌な笑い方で、首筋のあたりを濡れた刷毛でべろりとなでられたように不快な気分になる。粟立つ肌をシャツの上からさすり、昔はこんな笑い方をする男ではなかったのだがと思いつつ茨丞は正面の席に座る旧友を見る。舩治はタバコのやにが染み込んだように黄ばんだ眼球の灰色の瞳で茨丞を見返す。

しかしまあ、あれだな。人生ってのは分かんねえもんだ。あれは俺たちが大学生の時、二人で初めて株を買ったよなあ。ライブドアとソフトバンク、二人でどっちがどっちを買うか迷ってた。それで……

舩治は猿のペニスくらいの長さになったタバコを吸って煙を吐く。あれはどうしたんだっけなあ。ちらちらと茨丞の表情をうかがい答えを求める。舩治は答えを知っていてわざとそうしている。

コインで賭けたんだよ。親指でトスして表が出たら俺、裏がでたらお前がライブドア。

ああ！ そうだそうだ。

大仰に演技して、舩治は膝を叩き眼球よりさらに黄ばんだ歯を出し舌を口腔でぐるぐると動かして笑う。ひひ。

そんで、出てきたのは裏だ。その後、ライブドアの上場廃止が決定、株価の暴落で、俺がバイトで貯めた金は見事に吹っ飛んだ、でも、一方のお前は倍以上になったソフトバンクの株価が巻き添え食って下落する前に密かに売り抜けてやがったのさ。

まあ、あれは運が良かった。ビギナーズラックでたまたま良いタイミングに売り抜けただけのことさ。

でもその後も株を続けたお前はさらに幸運に恵まれて、やり始めは数十万だったのが一年後には三百万を超えてた。

それで調子に乗ってしまって就職もせずに、大学を中退してから四年間バクチ打ちみたいな生活を送って、今はこうして借金を抱えてる。

茨丞の言葉に舩治はどこか満足そうにうなずき含み笑いして短いタバコの吸尻を火のついたまま灰皿に捨てる。就職を考えなかったわけではない、茨丞は独想する。新就活者向けのセミナーみたいなものに足を運んだこともある。どこかの会社で人事の仕事をしているという男が講師で、学生と社会人の違いみたいなものについてたいそうな言葉を並べて熱弁を撒き散らし、それをスーツに身を固めた同級生たちがメモなど取りながら聞き入っていた。男の鼻の頭がやたら大きく巨峰の粒のようで本人もやたら気にしているのか話の合間合間にちょいちょいと指先でそれを掻くようなくせがあり、茨丞はそれが可笑しいと思うのだが他の学生たちは真剣な表情のまま男の顔を見つめているので、それが余計に可笑しくて茨丞は忍び笑った。しかし社会人と学生と

いう身分階級貴賤の違いが存在すると信じて疑わないかのような巨峰の珍講談に劣等意識を刷り込まれながら不安気な顔になる周囲の学生が、身分を引き上げてもらおうとするかのように背筋をぴしぴしと伸ばしている姿を見ていると、時間が経つにつれ茨丞は吐き気がしてきたのでその会場を出てしまった。シャツにジャケット並びにジーンズ、その会場でただ一人茨丞だけがスーツを着ていなかった。

いや！ お前はまだ幸運に恵まれてるよ。

めったらに大きな声で舛治は言い、タバコを置いて手持ち無沙汰になったのかコーヒーカップの取っ手を落ち着きなくかりかりといじる。

どこがだよ。いっとき三千万円を超えた資産がリーマンショックで吹っ飛んで、今じゃマイナス、このありさまだ。

どこが？ こうやって消費者金融に勤めてる俺のコネで借金の返済に融通を利かせてもらってんだろ。充分多分な幸運だ。

気分はどうてい幸せじゃない、借金があるってのは嫌なもんだよ。

そりゃお前が借金に慣れてないからだな。消費者金融で勤めてみりゃあすぐに分かるよ、借金が当たり前、日常。そういうやつが意外とたくさん世の中にいる。

舛治は腕時計を見る。あまり趣味がいいとは言えない金づくしの綺羅メッキ、指している時間は四時半過ぎで、舛治はそろそろ会社に戻ると言って財布を取り出す。

借金だけどな、今月分はさすがに払ってくれ。もう数ヶ月滞納してるし、ちょっと厳しい。

その言葉にうなづく茨丞の目の前、舛治は笑う。ひひ。今日は俺がおごるよ、今度は一発当ててお前がおごってくれ、舛治はそう言って財布から金を抜く。

おい。

店員が自分の召使でもあるかのような態度で舛治は店の制服を着たアルバイトを呼びつける。舛治が店員に勘定を頼むと、店員はレジでお願いしますと答える。

あ？ お前がこの金持って行って釣りとレシート持ってきてくりゃいいだろ。

相手を使い走りのように扱う舛治の言葉に店員は腹立ちを押さえ苦い胆汁のように溢れてくる感情を嘔み潰すようにふてくされた顔で金を受け取りレジへと引っ込む。その背中に舛治は舌打ちを投げつけ、素直に申し訳なさそうな顔ですいませんって言っときゃいいんだよ、演技でもいいからと言う。

やめとけよ。

見かねて、茨丞がとがめる口調で注意するが、舛治は底意地悪そうに嘲々と笑う。

まあ俺も昔はこんなことしなかったけどな、お前もきっと会社とかで働いてみりゃ分かる。毎日上司や客の横柄な態度に我慢を重ねてすいませんなんて言って卑屈になると、知らず知らず他人にもそれを求めてしまうのさ。多少自覚はあるけどな、自分だけがそうやって生きてるのはどうしようもなく不公平な感じがしてくる。どうせ、あの店員もよその店で同じことやるぜ。みんなやられた相手にやり返さず、その代わり弱い他人に復習するのさ。

茨丞はその弁解にどうしようもなく不快な気分になるがこれ以上言うのも馬鹿馬鹿しくて何も答えず黙る。店員から釣りを受け取り、舛治は財布をふところへしまい椅子から立ち上がる。

そんじゃ、もう行くわ。

そうか。

今月分、返す当てはあるんだろうな。

あるよ。

顔を上げた灰丞を、舛治はタバコのやにが染み込んだように黄ばんだ眼球の灰色の瞳で見返す

。

ああ、あの嫁もどき、かい？

その言葉にうなづく灰丞の目の前、舛治は笑う。ひひ。ひひ。

舛治が出て行った店内、テーブルの灰皿の上、灰粒にまみれた短い吸殻からはまだかすかに煙が漏れている。灰丞は椅子にもたれてじっとその揺煙を見つめながら、いつか借金をせずに済むくらいの金を稼ぐことができれば間違いなく舛治とは縁を切るだろうと考えている。

薄くて軽くて煌眩しく輝く甘い澄んだ空気に舞い上げられる羽毛のように体がふっと浮いてゆっくりと雲また雲を通りぬけ空へと吸い込まれていくような夢を見て茨丞は目を覚ます。茨丞は目を閉じたまま枕を手繰り寄せる、その無粋でもぞもぞとした動きに反応して、横で寝ていた瑠慄も目を覚ます。寝覚めの悪い茨丞と対照的に瑠慄はすぐに体を起こして伸びをする。

起きないの？

瑠慄はベッドにうづくまったままの茨丞を見下ろして言う。眠い、とだけ答えて茨丞は顔を枕に伏せ瑠慄のほうを見ない。瑠慄は野良犬でも扱うかのように少し荒っぽく茨丞の頭をがしがしとなでると、ちょっと寒いねと呟き裸の背中に薄手のシャツだけを羽織ってベッドから起き出す。この季節の白い朝陽は花浅葱色を溶かし込んで部屋に拡がるので、何の気なしに指先でかきあげた瑠慄の後髪が金色に透いてはらりと下がる。瑠慄はキッチンに入って行く、しばらくすると湯を沸かす音が聞こえコーヒーのにおいが部屋に漂って来た。起き抜け、茨丞は顔を上げつろつろとして開ききらない目で、マグカップを片手に窓際に立つ瑠慄の姿を見る。ブラインドから差し光は白い肌の上に縞模様を作り、胸の円いふくらみやへその下から柔らかく広がる女性的なふくよかさを、等間隔で体に沿った曲線を描く影がなめらかに描き出していた。

昨日、誕生日だったんだよね。

コーヒーを一口すすってから瑠慄がぽつりと言った言葉に、茨丞はぴんと来ないという顔をする。

玲の誕生日。

瑠慄は二人の息子の名前を言う。ああ、茨丞は小さいあくびのように声を漏らす。

もう四歳？

そうだよ。

茨丞はそれに対してただうなづく、何も言わない。瑠慄も特に何かを期待して話題を持ち出した様子ではなく、マグカップ片手の鼻歌まじりでブラインドの隙間から外を覗いたりする。息子は茨丞ではなく瑠慄の苗字を持っている。大学の同級生だった二人は、アクシデントとして産まれてきた子供を、特に結婚などはせず育てていくことにした。二人がその決断に至ったのは、大学中退を決めた株狂いで、自分が家族の父親という位置に収まるのがたまらなく居心地悪い感じがしていたという茨丞側の事情よりも何よりも、瑠慄がそういうやり方を希望したからだ。曰く、お嫁さんにはなってみたい気もするけど奥さんになるのは気持ち悪い。以来二人はこのことについて特段深刻になったこともなく、今の今に至るまで飄々綽々と過ごしてきた。二人は別に同居もせず、瑠慄は息子と両親と実家で暮らしている。知人友人親戚両親一同皆からそろっておかしい不自然と口を挟まれたこともあれど、二人からすればこのほうが当然自然のやり方なのだ。

何かプレゼント買ってやろうかな。

つぶやいた茨丞をちらっと見やった瑠慄はやや浮かない顔になり黒い鏡のようなコーヒーに視線を落とす。

いって。お金無いんでしょ。

実は、痛いところを突かれて苦笑いした茨丞はその通りだと答える。投資が上手く行っていた頃は養育費として結構な金額を瑠慄に渡していたりもしたのだが今となっては一銭も絞り出せない。それどころか、ちょくちょく瑠慄から借金すらしている。バツが悪く肩身が狭くみっともないとは思いつつも、しかし金を借りる当ては瑠慄以外にないので茨丞は沽券もなく無心せざるを得ない。

もしかして、またいくら必要なの？

巢穴に隠れる小動物のように気恥ずかしそうな様子の茨丞を見て勘鋭く察した瑠慄が訊く。実は、さらに痛いところを突かれて再び苦笑いした茨丞はその通りだと答える。もはや形無しで隠れる巢穴を求めて走りまわりたい気分なのだがあえて隠しても余計な醜態痴態をさらすだけなので素直になるしかない。

そう。

いっそう瑠慄の表情は浮かなくなり、ついたため息がコーヒーの湯気と一緒にふっと舞い上がり日の光に溶けて消える。今まで、茨丞は借金をしても何とか投資で稼いで律儀に返してきたのだが、徐々に迫々とジリ貧、とうとう前の借金を返せずに追加で借金を頼むようになってしまっている。嫌な沈黙が続き、瑠慄はしばらくじっと考え込む。始めのうちはしぶしぶながらも金を貸してくれていたのだが、ここへ来て借金が積み重なりだすともはや断ることも思案に入れている様子が伺える。茨丞は瑠慄の顔をまともに見ることができず伏し目でそちらへ視線を送る。ブラインドから差す光は白い肌の上に縞模様を作り、胸の円いふくらみやへその下から柔らかく広がる女性的なふくよかさを、等間隔で体に沿った曲線を描く影がなめらかに描き出していた。

いくら？

茨丞は平静を装おうとするもいよいよ恥ずかしくなるとごによごによ必要な金額を言う。再びため息、コーヒーの湯気と一緒にふっと舞い上がり日の光に溶けて消える。嫌な沈黙はまだまだ続き、机に置かれた時計の秒針が動く音が頭を小突くように響く。そしてようやく瑠慄は顔を上げた。

いいよ。

でもこれで最後にしてね、と瑠慄は付け加える。茨丞はほとんどうなだれるように力なくうなづく。語学の堪能な瑠慄は子供を育てながらも翻訳の仕事で多少の収入を得ており、普段は実家暮らしなので貯金もできている。とはいえそんなにちょくちょくと茨丞に金を貸せるほど余裕はない、それを茨丞も理解しているのでうなだれた頭を上げて瑠慄に顔を見せることもできないような気分になる。株なんかやめなさい、とかそんなふうに叱咤されないことがせめてもの救いだ。どんなに窮地に追い込まれようと茨丞には後にも先にもそれしかないのだ。間を置いて、マグカップを机に置く音がする。茨丞はふいに顔を上げてそちらを見る、瑠慄も茨丞のうなだれた頭を見ていた。

ひとつお願いがあるんだけど。

何？

来週の土曜日、玲の面倒を見てやってくれない？



瑠慄はいたずらっぽく笑う。苺丞は普段はほとんど会わない息子と接するのがあまり得意ではなく、全く気の進まないできれば避けたいようなことで、それを瑠慄はよく知っている。ましてや二人きりだなんて。しかしもちろん苺丞に断るという選択肢はない、だからほとんど反射的にうなづく、うなだれるように。

その日、高校の同窓会があるんだよね。普段ならお母さんに頼むんだけど、あいにくその日は両親が旅行に良く予定なの。だから苺丞にしか頼めないんだ。

まかせてくれよ。楽しんでおいで。

苺丞は追い込まれたような作り笑顔で請け合う。その有様が面白いのか瑠慄はにやにやしている。

よかったよかった。ありがとね。

瑠慄は羽織っていたシャツを脱いで椅子に掛け、シャワーを浴びに浴室へ行く。滑らかな肌をした背中にブラインドから差す光が縞模様を作り、後ろ姿の女性的なふくよかさを、等間隔で体に沿った曲線を描く影がなめらかに描き出していた。一人部屋にぽつねんとする苺丞はうなだれたままの頭をぼりぼりと搔く。机に置かれた時計の秒針が動く音が頭を小突くように響き、苺丞はこの状態にやはり苦笑いするしかない。

テレブ。

玲はその言葉を言い間違える。

テレビ。

苺丞はその言葉を修正してみる。

テレブイ。

玲はその言葉を言い間違える。ただし、わざと。

テレビ。

テレエビ。

玲はその言葉を言い間違えるために言い間違える。何度でも、言い間違えを試してみる、言葉を裏返したり表返したりうねらせたり伸ばしたりするように間違えてみる。同じ間違いを試し、今度は違う間違いを試し、そしてもともと何が正しかったのか、あるいは間違いしか存在していなかったのか、もはや分からないほどに、言い間違えるための言い間違いが繰り返される。

テテレボ。

トロボ。

瑠慄の頼み通りに四歳の息子を預かったものの毎度のごとくどう扱っていいものやら分からず、苺丞はとりあえず手間がかからなそうなのでテレビを見せてやり過ごそうとする。玲はテレビに飽きたり飽きなかったり、あるいは初めから飽きていたかあるいは飽きもせずに、テレビをじっと見つめ、遊び、ちらと見て、遊ぶ。といっても苺丞の部屋にはおもちゃなどはないので、玲は何が何だか不合理不条理な具合で遊ぶ。床に寝転んで赤ん坊または老人のように手足をばたばたさせたり、起き上がってぐるっと回転したかと思うとまた寝転ぶようなしぐさを見せて結局寝転ばなかったりあるいは立つと同時に寝転んでいるかのような、またはずっと寝転んでいるかのような。今度は床に座ってフローリングの目地を指でなぞり、そのうちぎゅんぎゅんと擬音をつぶやいてその目地から指が脱線して宙を舞う。とにかくもてあましている、玲もそうだが苺丞もそうだった。株の取引でもやっていれば気がまぎれるのだが、今日は土曜日で株式市場が閉まっている。普段なら土日は気晴らしにどこかへ出かけたり株の研究でもするところなのだが今日はそういう感じでもない。苺丞は玲をじっと観察してみる。半月型の目や唇の厚さやたまにプレーリードッグのように背筋をぴよんと伸ばすしぐさなどは瑠慄にそっくりで、あまり自分のほうの面影があるようには見えない。いまだに、それが息子だというのは現実味をとまなわないう奇妙な感じがしてならない、ややもすると永久にその実感は持たないかも分からない。そんなこんなで苺丞は息子と噛みあうとか通じ合うという風にはならず何とない溝や距離が玲が産まれて四年の間に埋まったためしもなく、玲の方でもそういう感覚を持っているのか互いに一緒にいるときはどうにも常に落ち着かず収まり悪い雰囲気には耐えるはめになってしまう。

気がつく、玲は株についての本が並ぶ棚を見つめており、かと思えば、指を背表紙に当てて左右に滑らせばばばと音を鳴らす。エロ本でも見せてみようかと苺丞は冗談半分に考える。四歳とはいえ男同士、通じ合うものを見いだせるかもしれない。当然四歳の子供にも性欲はあるだろうし、人間の世界の日常にありふれているものを神経質に隠すこともなからうし。ただ、そんなことをしてそれが瑠慄にバレたら怒るだろうと思い、苺丞はやっぱりやめておく。借金を抱え

ている手前なので瑠慄の感情を害するかもしれないようなことは避けるのが懸命だろう、子供の無垢を保障しない行為は中流的教育を受けた親たちのナルシズムを逆撫です。ということはこんな思いつきをする自分は親という感覚など微塵も持ち得ないヤカラなのだたと苺丞はつくづくだった。そんなことを考えていると、いつの間にか玲が目の前に立ってじっと苺丞を見つめている。

かび。

玲はその言葉を言い間違える。

かび？

苺丞は何だかよく分からないのでオウム返しをする。

きゃみ。

玲はその言葉を言い間違える。ただし、わざと。

きゃみ？

かかび。

玲はその言葉を言い間違えるために言い間違える。いったい何だと苺丞が思えば玲は本を一つ抜き取ってそのページをつまみばさばさと揺らして見せる。

紙？

苺丞は訊く、玲はばさばさ揺らす。つまり紙を所望しているようだ。紙なら何でもいいのだろうか、試みに苺丞は机の上に放置されていたコンビニのレシートを与えてみるが玲はいいやと首を横に振って取り合わない。そして再び本のページをつまみばさばさと揺らして見せる。どうやらそういう紙が欲しいらしい、苺丞はどうせもう読み終えた本だからと思いその本を手にとるとページをきれいに破いて玲にくれてやる。玲は手にした紙きれを嬉しそうにばさばさと揺らして床に置くと折り紙を始める。正方形の紙でないと上手くできないのではないかと苺丞は見えていたが玲が作ったのは紙飛行機だったのでさほどそれは問題にならない。四歳なので出来上々とはいかないがどうにか仕上がった紙飛行機を玲は部屋の中で投げてみる、不恰好は飛行機は飛んで行くというよりも描孤して裏返り床につると滑り落ちる。玲は真っ直ぐ飛ばない紙飛行機に首をかしげてもう一度投げるがやはり描孤してつると床へ、また拾い上げて投げるが描孤してつると床へ。猫を追いかける狐のように玲はぐるぐると飛行機を追いかけて拾い投げて追いかける。そのうち投げるのはやめて飛行機型の紙切れを手を持ったままぎゅんぎゅんと擬音をつぶやいてそれが飛んでいるかのように宙を動かすことに満足を見出す。ぎゅんぎゅん、ぎゅんぎゅん、紙飛行機はとんでもないスピードで宙に止まっている。

いつのまにか玲はゆるゆると横になって頬を床にくっつけじっとしていたかと思うと次の瞬間にはもう寢息を立てている。苺丞はすっかり色のくすんだブランケットを手にとってほこりを払うと殻のついた剥き身のゆで卵のような子供の体にかけてやり、自分は椅子に座って机に頬杖をつきながらその寝顔を眺めてみる。そして世の中の多くの親がそうしているようにそこに自分と共通するものや同一性や類似性や遺伝や血のつながりを見出そうとしてみる。何も、全く、苺丞はそこに探し探り出すことはなかった。別の生き物、招かれざる野良猫、数学的外国人、ディスクコード・セクステット、苺丞は息子と呼ばれるものについてそういう違和を感じるばかりで、

むしろそれこそが天然の道理であるという具合にすら思っている。市井の親々一同が自らの子々娘息をもって得ているこの世に自らの生を受け継ぐ何かを残したという満足など茨丞には無縁でしかない。ただそれ以上に茨丞が感じているのはとりあえずはこの一日が終わりそうだということで、そのことに安堵してふつりともれるため息をはく。

何やら話があるのでちょっと一杯どうだと舂治から連絡を受けた茨丞は左右に首をひねりながら薄い財布を触る。それを見透かし予測し備えていたかのように舂治は俺のおごりだから心配するなと電話の向こうで笑う。ひひ。いつもは借金の返済の融通のことで茨丞もいやいやながらしかし会って頼まざるを得ないので面会を申し入れるのだが今回は普段と違い舂治から連絡をよこしてそんなことを言うのだ。珍奇妙々なことで疑わしく何ぞの企みでも抱懐しているのかと茨丞は二度もなく三度もなく首をひねってみるが相手の思惑など知りようもなく、あるいは舂治はやはり一図あってこんな誘いをかけるのだと思いつつも、しかし取り分けて断る理由もないような気がして茨丞は迷虫のごとく火の中へ飛び込むことにする。

待ち合わせたのはパブのような所、店に入った茨丞は黒艶光る木の丸テーブルの後ろに座る舂治を見つけてその正面に座る。バスパールエールを片手にしながら舂治は軽くあいさつして檜の木皮のような色をしたガラスの灰皿にタバコの灰を落とす、暗い店内の照明の下でタバコの煙が硫黄のような色に光って闇に吸い込まれ消えていく。

で、調子は？ 儲かってるかい？

景気の良い答えが返ってこないのは想像に難くないはず、舂治はちびっこをコケにするかのような笑みで唇の端をくっくと引きつらせて訊ねる。

今月はましなほうだな。借金の返済に頭を抱える必要がないくらいの利益はどうにかなったし。

ふっふっと鼻で笑ってうなづく舂治、鼻口から妖気のような煙が漏れる。

まあ、とりあえず一杯注文してこいよ。

舂治は灰皿と同じ色をした指で千円札を取り出してテーブルに置く。しなだれたその千円札を指で弾き飛ばしたいような衝動が浮かんだ茨丞は、しかしそんな往生際の悪いプライドや意地が出てくる事に自嘲しそうになりながらも金を受け取って立ち上がり注文に行く。カウンターに立っているデカ目メイクの女に一ポイントのギネスを注文すると女は無言無表情無愛想にうなずいてグラスにビールを注ぐ。グラスの中のギネスの黒色は店内の闇や女のシャドーよりはるかにブライトで冴えた輪郭を持っている。女はじっと茨丞の目を見つめながらグラスを手渡す、その仕草は変に教育されて愛想のいいフランチャイズ店の店員などとは違いとかく淡々としている。席に戻った茨丞は何となく落ち着かない気分が急かされて何度もグラスを口に運び気がついたときには既に半分くらいのギネスを飲んでしまっていた。

もうどれくらいになる？ ジリ貧の生活は。

舂治の朽葉色の瞳がぎょろぎょろと振動して茨丞を観察している、いとど落ち着かなくなり茨丞はまたビールを一口、何か硬いものを押し込むように飲み下す。

もう二年くらいかな。初めて借金をしたのがそのくらい前だったはずだし。

そうかい。

舂治は軽くうなずいて檜の木皮のような色をしたガラスの灰皿にタバコの灰を落とす、暗い店内の照明の下でタバコの煙が硫黄のような色に光って闇に吸い込まれ消えていく。

抜け出せる見込みはあるのか？

景気の良い答えが返ってこないのはやはり想像に難くないはずで、舂治はちびっこをコケにす

るかのような笑みで唇の端をくっくっと引きつらせて訊ねる。茨丞は言葉を浪費するまでもないという調子で肩をすくめてまたビールを一口。舩治は何か考えている様子で天井を仰ぐ、鼻口から漏れる妖気のような煙がふっと横切る影で闇に沈む。

一つ、提案があるんだ。それは今日ここにわざわざお前を呼び出した理由でもあるけどな。

灰皿と同じ色をした指を一本立てて眉前にかざし、舩治はぬうっと伸びるような仕草で顔を傾けて茨丞の顔をのぞき込む。茨丞は再び肩をすくめてグラスをテーブルに置く、今度はビールをあおりたい衝動を抑えて舩治の顔を見返す。このままだと覆い被さる舩治の影に圧殺されそうな気がして、茨丞はどうにか体勢を立て直そうというような意持ちになっていた。

何だよ。儲け話ならありがたいけど。

茨丞の言葉に舩治は意地悪くいたずらで含みある笑いをこぼす。ひひ。

儲けるかどうか！ それはお前しだいだ。

舩治は声を大きくする、ぬうっと伸ばした首を亀のように両肩の間に引っ込めて泡浮くバスパールエールをぐっと口の中へ流す。

俺しだい？

そうさ。お前は確か言ってたはずだ、いつまでたっても借金を完済できない原因はなんだ？

それは……。茨丞は口ごもりポケットの中に入った小銭、あるいはギネスを買ったときのお釣りを指先でじゃくじゃくと弄り混ぜる。

金がないからだ。元手になる資本が少なすぎて、たとえいい成績を上げて借金を賄うのに充分な額が稼げない。

そう、そうだろう。

舩治は大きくうなずいて檜の木皮のような色をしたガラスの灰皿にタバコの灰を落とす、鼻口から妖気のような煙が漏れる。

もっと元手が必要、それは借金をして以来ずっと考えてきたことだけだな。

それこそが借金返済に関する茨丞の最大の悩みで、生活費をまかないつつ借金を着実に返そうと思えばそこそこの利益を安定的に出さないといけない。しかしそんなのは並大抵のことではないので、当然のことながらただにただに借金が重なるばかりだ。元手となる資本さえ大きければもっと楽に借金を返していける、しかし茨丞のような自転車操業よりなおひどいリスクまみれの不安定な生活ではそれを望むべくもない。

そこで提案するんだが。

舩治の首がまたぬうっと前へ伸びて来る、照明を受けて床へ床へ影が伸びて隣のテーブルに座っていた女の足肌を浸す。足の甲に浮いた静脈の紫があまりに生々しく鮮々しく滑々しくてまるで何匹もの爬虫類の舌が皮膚の下を走りめぐってからみ合っているかのように見える。

何だよ。

いや、単純なことさ！ お前に金を融通してやろうってんだ。それもまとまった金をな。

金？ いくら？

中途半端は良くないからな、どんと一千万はどうだ？

出てきそうになる言葉が喉につかえて止まり、茨丞はただ舩治の朽葉色の瞳を見るのみ。ぎょ

ろぎよると震えて、にごり、その真意の程はわずかにも表面に浮かんでこない、淀んだ虹彩に深く沈んで怪しくひそかしく呼吸をしている。

そんなことができるのか？

いや何、俺の信用を使えばいいのさ。それで金を消費者金融からかき集める。

でも……、それはちょっとなあ。

ため息つく茨丞に、舛治は小さく長く太い声で笑う。ひひ。

心配はいらない、俺はお前が思ってるよりずっと金を持ってて生活も安定してるぜ。

うう、茨丞は歯切れ悪く自信無くなる。さっきから胃がむかついている、元来酒に強くもないのに空腹にビールを流し込んだのでだんだん気分が悪くなっているのだ。

ためらうなよ、このままじゃちが明かねえだろ？ 俺もいつまでも返って来そうにない金を貸し続けるわけにもいかねえんだよ。

でも失敗したら？

舛治はさっきより大きく長く太い声で笑う。ひひ。ひひ。

そんときや株をすっぱりやめて、勤め人にでもなって金を返してくれりゃあいんだよ。

それは、なあ……。

怖気付いてくれるなよ、こりゃチャンスなんだぜ。

俺に勤め人なんて無理だよ、俺はああいう世界に適応できない。

そう思い込んでるだけさ。会社勤めしてるのなんて結局、普通すぎるくらい普通の人間ばかりなんだからな。

普通以下だ、俺は。落伍者でしかない。

それが思い込みなんだよ。もしくは、お前は単にモラトリアムの中にいたいだけさ。

どっちの意味でだ？

もちろん両方さ！

舛治はもっともっと大きく長く太い声で笑う。ひひ。ひひ。

ある意味で、お前は往生際の悪い大学生みたいに、いつまでも保護によって猶予された宙吊りの金と自由の中でふらふらと生きてるのさ。いまだに、いまだにな！

おいおい、いちおう株は俺の仕事で、ある程度の金を稼いでるんだぜ？

全く儲かってないのに？ お前の収支状態は会社ならとっくに廃業すべきレベルだ。そも、そもだ、お前は最初の失敗で借金生活に追い込まれた時に、株を止めておくべきだったんだよ。少ない元手を借り入れて、それを投資で増やしながらか生活するなんてどう考えても現実的じゃない。つまり、つまりだ、その時点でお前の選択は勤め人になること以外になかった、でもお前はそれを拒んだ、お前はただ単に社会人になるのを今の今までだだっ子みたいに嫌がり続けてきただけなのさ。

照明の光を受けた舛治の首の影が樽からこぼれた大量の赤ワインのように床へ床へ伸びて隣のテーブルに座っていた女の足肌を浸没させる。足の甲に浮いた静脈の紫があまりに生々しく毒々しく滑々しくてまるで何匹もの爬虫類の舌が皮膚の下を走りめぐってからみ合いざわざわと泡立つように脈打っている。茨丞は何も答えられない。握りしめたグラスの黒いギネスの中に舛治

の影がごぼごぼと渦巻いて注がれている、それを口に運ぶことはおろか見るだけでも吐きそうになる。舩治の指摘は真実のように思えるし、あるいはそれは自分以外の多くの人間にとって正しい見方なのだろうが、しかし自分の本心はそれとは全く別のもので、自分だけが持っている全く別の答えがある、茨丞にはその確信がある。それなのに言葉が出ない、ただそこに必要とされている言葉がない。茨丞は気まずく所在なく頼みなく荒野に投げ出されてた孤児のようにそこにいる。

どうだ？　ここで一つ大勝負に出てみるよ。何かに区切りをつけるには、思い切った勝負に出るのが良い、後々で悔やんだりせずに済むだろうしなあ。

舩治は勝ち誇って茨丞を見、ぽつんとした灰皿をいじめるようにタバコの火を強く強く押し付けている。硫黄のような色に光るタバコの煙の奥で店の照明がもう一つの巨大な目のようにうなだれた茨丞を見下ろす。

ちょっと考えさせてくれ。

押し潰されるタバコのスタブに視線を投げ落としながら茨丞はどうか力もなくふつり、言葉をテーブルの上に転がす。舩治は特に何も言わない、ただ勝ちを誇って笑いうなずく。ひひ。灰皿からかすかに上っていた煙が消えてはっきりと見渡せるようになった店内の闇は黒鉄の彫刻のように硬く冷たい。茨丞は背中を突き刺すような寒気で震える、この生活が終わるかもしれない、それも自分のありとあらゆる全てを強奪されるという形で。しかし舩治の提案に乗っても乗らなくても結果は出てしまうだろう。いつもいつも上手いこと逃げ道を見つけながらあらゆる重圧をすり抜けてきたつもりだったがとうとう捕まりつつあるらしい、茨丞は自分の置かれている状況を手遅れにすら思える今の今さらにおいて考え始めている。樽からこぼれた大量の赤ワインのように床へ床へ伸びた影に足肌を浸没させられた隣のテーブルの女はすっかり酔っ払って狂ったようなテンションではしゃぎ引き裂かれたいちじくのような赤い赤い口をがばっと開けてそこから悲鳴のようなあるいは檻から放たれた無数の発情する毒蛇のような笑い声を店内にまき散らす。その笑い声は火であぶられたアイスピックのように茨丞のこめかみを何度も何度も突き刺して、茨丞は激しい頭痛と吐き気に飲み込まれて制御を失う。

トイレに行くわ。

そのひと言が限界だった、完全に酔いが回った茨丞は大げさな勢いで椅子から立ち上がり頭を押さえながらトイレに駆け込む。こめかみから大量の血が出ているような妄幻に取り憑かれそこに触れた指にぬるぬるとした血液の感触がないのが不自然だとしか思えない。フタを開けた便器が薄汚れていることに茨丞は妙に安心した気分になる。これなら思う存分に汚してもいい、茨丞は腹の奥底からせり上がってくるものを思い切り便器にぶちまける。



まだだ。まだあがる。

せわしくなく、茨丞は指先をばたばたと動かす。222、224、222、223、220！  
目の前でぐるぐると回転するように光りながら動く数字を見つめ、指先はいっそうせわしくもどかしく行きつ戻りつ苛立って握ったマウスの表面を揺れる。

まだだ。まだあがる。

いつもの調子、茨丞は祈るような視線を画面に送りながらマウスを握りしめ気まぐれに上へ下へと行き惑う株価に翻弄される。221、219、218、216、215…… からかい半分のようにずる、ずると値を下げていく画面上の数字を茨丞はしかめ面で眺め、ほおづえをついたまま前歯を噛み合わせてガチガチといわせている。負けが続いているときに落ちていく株価を眺めているのはひどいストレスで茨丞はくやしさと力を込めてマウスを握りしめる。ぎ、ぎ、とマウスはひねり潰される甲虫のような鳴き声を出す。株価の下落によってさっきまで出ていた利益が消滅し、ついの果てにはそれがぐるりと反転して損失へと変わる。とうとう我慢の閾値を飛び越えて、茨丞は声にならない息の破裂音のような、水中の窒息した叫びのような音の発現とともに立ち上がり握りしめたマウスを激昂まじりに振り上げせっかく買い替えたばかりのパソコンのディスプレイをにらみつけたものの、すんでのところ踏みとどまり肩を震わせながら荒く荒く息を吐いてマウスを机の上に置く。しかし怒りは収まらず、画面のわきに子猫の死骸のような食いかけのリンゴがすでに腐ったまま放ったらかしになっていたのを見つけるとまはらわたが煮えくり裏返しして、再び三度と荒く荒く息を吐いてぬるぬるする腐リンゴをつかみ上げると部屋の壁めがけてぶん投げてしまう。へちゃ、とぶよぶよのリンゴは間の抜けた音を出して潰れ部屋じゅうに甘いにおいのする臭い汁をまき散らして床へ落ちる。マウスを粉々にするよりはまじなやり方だったがリンゴをつかんだ手をついつい顔に当ててしまい甘くて臭いにおいが鼻の中にしみこんでたくさんの小さな虫にはりつかれでもしたかのように粘膜がしびれチクチクと痛む。その悪臭に吐きそうになった茨丞は急いで手と顔を洗う。

219、221、223、221、222…… 株価が戻って数字が横ばいになってきたところで茨丞はすっかりやる気をなくしてその日の取引を手じまうことにする。成績はさほど悪いわけでもない、今月はどうにか借金に頼らずに乗り切ることができそうだ。なのに茨丞には落ち着きがない、どうしてもパブで舐治に言われたことが引っかかっている、ささいなことで感情がさざ波立ちうねり渦巻き溢れ昂ぶる。ちょこんと正座した子供のような手元に置かれた哀れなマウスをつかみ上げてぶん投げようとしたことなど数知れず、ただ常に浅呼吸深呼吸して感情が密度を高めて硬く硬くなりその圧力が噴出しそうになるのを揉みほぐし和らげなだめすかしてだましましやっている。このくらいの稼ぎではだめなのだ、この生活の終り、濃窒なスモッグの塊のような終りが、獣の乱杭歯の間から漏れる熱い息の音をぼうぼうといわせながら、ゆくりのたりとした緩慢さで頭上から蠢迫してくる。その気配を感じるほどにますます茨丞は落ち着きがなくなり、株の売買にムラができ危うく感情的な判断を下してひどい損失を抱えてしまいそうになる。遅かれ早かれいちかばちかの決断をしなければならぬ時は来る、しかしその瞬間が迫るほどに茨丞は往生際悪く無駄な体力を浪費して走りまわるようにそこに到るまでの道を可能なかぎり

迂回しようとするばかりで、のりりかくらりかどうにかなるような方法を夢見してしまう。おそらくまたは間違いなく自分は舛治の提案に乗るしかないと茨丞は分かっているのだが、どうにも舛治が何かをたくらんでいて自分を罠にはめようとしているような気がしてならない。それに、茨丞は自分で自分のことを情け無いとは思いつつも失敗したときのことがとかく恐ろしい。チャンスはたった一度だけで、自分の下した決定が同時に自分自身についての決定を下すことになる。株の取引だけで生活してきた茨丞には、自分が生コンのようなスーツに身を沈めネクタイで首を吊って会社に勤めることなど人生の終りのようにしか思えない、というかそれが自分に勤まるとも思えない。茨丞は自分のことを社会に適応できない落伍者だとしか考えていないのだ。机の上で突っ伏していた茨丞は抱えた頭をかきむしって顔を上げる、すでに今日の株式市場は終了しており、パソコンの画面の中では終了時の売りと買いの注文を示す数字が風化した彫像のように佇み物言わずただ冷酷に茨丞を拒み突き放している。

気分を多少なりとも晴らすべく散歩を思い立ち、茨丞はそぞろな気分を遙々とした道々へと向けて外へ出る。公園、たどり着いたそこは万人に開かれた空間のはずなのだが何ぶん平日の昼なのでそんなところを一人でうろつく若い男に対する人々の視線は優しくない。取り分けて子連れの若い母親の群れは茨丞を不審者と見当づけ、砂場で遊ぶ幼子たちから視線を遮るようにして並びちらちらざらざらと様子を伺ってくる。ベンチに座った茨丞は背筋を伸ばしできる限り不審者ではないよというそぶりを示してみせるのだがしかし子を守るという使命感に存在意義を見出して生きる母親たちの偏見は強く、そのじろじろとした猜疑の目はぶんぶんと鳴るアブの群れのように茨丞の顔の周りを飛び回る。ちらりとでも茨丞が見返すと母親たちはああ恐ろしい不潔な狼が私の貞操を狙っていますわ奥様とでもいうように隣同士でひそひそと陰話をする。これが社会人なる肩書きを持たない男に対する世間の仕打ちかと茨丞はため息をつく。ベンチから立ち上がりその場を離れた茨丞がやって来たのは公園の隅、そこにはダンボールとビニールシートが折り重なったホームレスの寝床があった。追い追いこのような生活をするのも視野に入れて備えていかなければならないかなと思ひ茨丞はその構造などをつぶさに観察して、間取りやファサードなど自分ならどうするだろうと考えてみる。来るべき日のために今から建築の本でも読みあさってみようか、ダンボール建築の専門知識でも身につければ他のホームレス達とも仲良くなりやすいかもしれない、いや、そんなことよりサバイバルの本を読みあさるほうが先決、現実的で有用そうだな、茨丞はダンボールの寝床の前につっ立ったまま手のひらを無精ひげに当ててじゃれるようにさすりながらにやにやす。ダンボールの寝床の中は暗い湿った空気がじっと滞留して何かうぞうぞしい気配がしている。寝床の前で立ち止まり動かない茨丞の気配をいぶかしく思ったのか中で横になっていたらしい住人が、がさ、がさと動きだす。そしてダンボールの入口から怯えるように警戒するように遠慮がちにひょうとした動きで年老いた男の顔が出てきてまじもじと茨丞を見上げ、しかしすぐに無関心そうに視線をそらし逃げるようにまたダンボールの闇の中へ引っ込む。まあ自分の寝床をじろじろと人に観察されるのはあまり良い気分ではあるまいと思ひ茨丞は踵を返す。

おい。

後ろから声、振り向いた茨丞をダンボールの中から再び顔を出した老人が見ている。二つ並んだ古銭のような灰汁色の目がちろちろと泳ぎ、何本か抜け落ちて大きく隙間の空いた歯にはすっかり黄色い色素が沈着して息をするたびに腐ったように黒い歯肉の上にたまる緑がかった痰まじりのツバがじゅるじゅると音を立てる。刷毛で油を塗ったようにテカった赤銅色の額には白い白い前髪がねっとりべったりと貼りついて動かない。垢と汗の染み込んだ皮膚からは風が吹く度にむせ返るような臭いが流れ出て、茨丞は無精ひげを触るふりをして鼻を手で覆う。

なんか用？

かなり警戒した様子の茨丞が愉快的なのか老人は歯の隙間からひゅるひゅると笛のように鳴る息を漏らして笑う。

兄ちゃん、仕事ないんかい？ こんな昼間にワシみたいなもんのこと、じろじろ見て。

老人は丁寧にシワを折りたたむような笑顔をしている。茨丞もこれから仲間になるかもしれない相手に対して敵意よりも親近感のほうが優っているので、不自然ではないくらいの笑顔を作って返す。

いや、仕事はもう終わったよ。

もう？ まだ三時をちょっと回ったぐらいやのに。ええ仕事してるなあ。

老人はシワを開いて驚いた顔になり、そしてまたシワを折りたたんで笑顔に戻る。まるでそういうメカニズムのおもちゃのようだ。

まあね。稼ぎは少ないけど、すごく気に入ってる。

そりゃあええな。金なんかなくても自由な時間が多いのが一番や。

ある程度の金があればね。実際、今は時間より金が欲しい。

そんならもっと働いたらええ、残業なんかたいしたことないやろ、若いんやし。

老人は歯の隙間からひゅるひゅると笛のように鳴る息を漏らして笑う。

残業は無理だね、定時以上には働けない仕事なんだ。

ああ、正社員勤めじゃなくてアルバイトか。そら金なくて大変やろ。

アルバイト、ですらないよ。

そりゃまた、いったいどういう仕事だ？ 確かにあんたは定職持ちとも職なしとも日雇いとも学生とも違う顔つきをしとるがなあ。

茨丞に興味をそそられている様子の老人は占い師のようにその本質を見抜こうと二つ並んだ古銭のような灰汁色の目をちろちろと泳がせる。

株。その日暮らしのバクチ打ちみたいなもんだよ。

茨丞はおどけて肩をすくめ、不自然ではないくらいの笑顔を作る。しかし老人は思ってもみないような陰しい表情になり折りたたまれていたシワがいつそう顔の中心に集まりぐっと力がこもる。

株か。ずうっとやってんのか？

重い声、老人はどこかうなだれたように肩を落とす。

もう四年くらいかな。

そうかい。そうかい。

老人の漏らすわけあり気なため息は笑いと同じようにひゆるひゆると笛鳴る。

株やってんのはそんなに変なことかい？

そうじゃない、実を言うとワシも昔やってたクチでねえ。

へえ、そりゃ面白いじゃんか。儲かってたのかい？

すると老人は今までもなく愉快そうに笛のように鳴る息を漏らして笑う。ひゆる、ひゆる。ひゆる、ひゆる。

今のワシの体たらくを見れば分かる話だろう。あえて訊いてんなら兄ちゃんもずいぶん意地悪いこったな。

ということは大損したのか。

そうだとすれば株のことを聞いて険しい顔になったのも説明がつくなと苺丞は思いながら手のひらを無精ひげに当ててじゃれるようにさすって老人の顔を見る。ひゆる、ひゆる。老人はまた笑う。

その通り。でもなあ、いつときはメチャクチャ儲かってたんだぜえ？ バブルってやつのおかげでな。兄ちゃんはまだ生まれて間もないくらいのころかねえ、でも耳にしたことくらいはあんだろ？

あるよ。でも物心ついたときにはすでに終わってたし、俺は景気については不況という言葉以外で語られてるのを聞いたことはない。

八十年代ってのはな、日経平均の株価が十年で五倍になったのさ。兄ちゃんからしたら夢みたいな話だろう？ でも現実にそういうことがあって、ワシみたいな山師は大儲けしてたのさあ。

ジイさんはバブルがふっ飛んだせいで文無しになったのかい？

いやあ、そうでもねえ。ワシは少なくともバブルがはじけた時は上手く逃げたほうさ、それなりに損はしたけど投資家のはしくれだったしな。あの時大損したのはヤマっ気丸出しの素人たちだよ。

じゃあなんで……

今、こんなふうになってるのかって？ そりゃあ欲に取りつかれたからだ。俺は勝負勘だけで勝ち残ってきたヤツだったから経済の知識なんかなくて、愚かなことにもう一回ああいうバブルみたいな上昇相場が来るって夢見てたのさ。

それで無理な勝負を続けてきたってことかい？

そう、それもしつこく馬鹿の一つ覚えで、何の考えもなしに儲けられた八十年代と同じ金の賭け方を十年以上も続けてしまったのさ。それで、ちょうど二千年くらいのネットバブル崩壊に完全にとどめをさされたんだ。それでも何とか細々と生きてたんだけど、二年前にとうとう金が尽きたんで、今じゃこういう暮らしをしてる。

苺丞は思わず顔をそむけ、そういう老人の姿が自分の未来のような気がして肌が粟立つ。

まあ、市場ってのは人間には無関心だよ。だからそれに期待しちゃだめだな。こっちが何を考えていようとも、常に自分のワガママでしか動かねえ。そんなヤツと心中する覚悟はあるかい？

ないならとっとと手を引くこった。深みにはまるとケツ毛までむしりとられるぜ。

ひゅる、ひゅる。老人は愛嬌あるしぐさで手を振って見せ、笛鳴る息で笑う。

もうすでに深みにはまってるみたいな状態だけど。

茨丞は自嘲気味に笑いを返す。

大損こいたか？

こいてるね。そのうえ借金まで背負ってる。

また老人のシワが開く。ひゅる、と同じ音だが今度はため息。

そりゃいかん、はよう手を引け。

そうもいかないよ、他にとりえは何も無いんだから。頭おかしいって思われんのかもしれないけど、俺はどうしても株か破滅かみたいな気分になんないんだ。

ワシも長年専業で相場はとった人間なんで、その気持ちは分からんでもないがな。しかしギャンブルに取りつかれたらお終いだよお。無理を承知で言うがな、やっぱり足を洗うのが一番だ。誓ってもいいがワシは若者に説教するのが好きな阿呆じゃあない、そんなワシが言うんだから、ちっとぐらい考えてみておくれ。

ジイさん、俺はギャンブル依存ってヤカラじゃないんだ。実際、パチンコとかは嫌いなんだぜ？俺が株に夢中なのは、自分独りで世の中と正面切ってやり合ってる感じがするからさ。これが会社勤めなんかだとそうは行かないだろ。つまんない意地張ってるだけかもしれないんだけど、どんなに貧乏でも俺はその充実感を手放したくないのさ。

ふん、ふん、とうなずく老人はねっとりべっとりした額のあぶらをぬぐうように前髪をかきあげ頭をかきむしる。

まあ、ワシは他人の生き方について口を出すなんてのは阿呆のすることだと思ってるから、あくまでワシ自身のことを喋るんだが.....

老人は喉に詰まった重たい靄をぐっと老いた力を振り絞って押し出すように言葉を続ける。

負けるというのは本当にみじめだ。何もかもを後悔する、氣力を失い何もかもができなくなる、だから手を引くということ、負ける前にやめるということはとても大事なんだ、引き際の見極めは勝負師の最大の仕事だよ。会社勤めってのは一つの手なのさあ、勝ち負けはあるよ、でもワシやお前さんみたいな人間がやる勝負に比べりゃはるかに安全だ。ワシらが負けるときは、そりゃもう徹底的に負ける、粉々になって再起不可能なまでにな。でも定職についたときゃあ、負けてもある程度やり直しは利くんだ。もちろん自分の人生だ、好きにやったらええ、でも覚悟は決めないといけない。

ずいぶん老人の口調が重々しいので茨丞は次に返す言葉を上手く見つけられずに、ただ老人のしぐさを真似るように、前髪をかきあげ頭をかきむしってしばらく考える。

でもなあ、ジイさん、今さら戻れねえよ。今は職があふれてる時代じゃねえ、俺は大学中退で学歴も職歴もない。つまはじきになったまんま、この場所から勝負をかけていくしかねえんだ。

ひゅる、ひゅる。一つため息、老人はまた愛嬌あるしぐさを見せて手を振って答える。

いや、すまん、辛気臭いことを言っちゃった。おわびに酒の一杯でもおごりたいが、ここにはゴミ箱から拾った臭い臭いビールと焼酎の残りもんしかねえ！兄ちゃん、もう行きねえ。ワシみたいな人と話してる時間があったら一秒でも長く明日の相場のことを考えたほうがええ。

ひゅる、ひゅる。老人は歯の隙間から笛のように鳴る息を漏らして、今度は笑う。

茨丞はじっと老人を見つめる、何か考え、ためらい、前髪をかきあげて頭をかきむしり、迷い、そして口を開く。

なあジイさん、再起したいって思いはないのか？

そりゃ、できるもんならなあ。でも、今はそんな手段を考える気力すらねえんだ。兄ちゃん、こんなクソジイと喋ってたら貧乏神が乗り移るぜえ？

ひゅる、ひゅる。老人は笑うがその声に明るさはない。

茨丞はやはりじっと老人を見つめる、何か考え、ためらい、前髪をかきあげて頭をかきむしり、迷い、そしてとうとう口をつぐむ。

互いにそれ以上は何も言わない、茨丞は踵を返して歩き始めながらも、老人が再び威勢を取り戻して何かひと声かけてくれるのを期待している。しかし老人の気配はすごすごと寝床に巣もぐるだけで、親子連れもいなくなり静まり返った公園の中、茨丞のスニーカーが砂地をこする音がするばかり。茨丞はどうしようもなくいら立ってくる、無性に何もかも、心地良い夕方の風、緑茂る公園の木々、公園の外を往来する人々の楽しげな笑い、かすかに漂っている老人の体臭、西の空の茜色、全てがいら立たしい。そのいら立ちは徐々に輪郭を持ち、巨大なうねりとなって奔流し渦を巻いて広がる。

金が欲しい。

いら立ちは欲望へと昇華して極彩色の強迫観念となる。金が欲しい、金が欲しい、その言葉が頭の中を埋め尽くし、それは瞬間、茨丞の人格の全てを支配する。金持ちになりたいわけではない、贅沢な暮らし、大きな家、高級車、きれいな女、人々の尊敬、権力、そういうものへの欲望からはいっさい独立した、純粋な欲望としてそれは反復してせり上がり増幅して手が付けられなくなっていく。金が欲しい、ただそのことだけに憑依され茨丞は他のことを何も考えることができない。

返すべき金の一部を握りしめて会いに来た茨丞に瑠慄はちょっと出かけようと言い、茨丞はそのまま車に乗っけられてショッピングモールでの買い物に付き合わされるはめになる。モールに着いた瑠慄は店また店へと歩きながら日用雑貨や玲の衣類など選び選ぶ。

ねえ、これカワイくない？

もわもわしたブルーの生地にピンクの水玉の浮いた靴下をつまんでひらひらさせ、瑠慄は茨丞に意見を求める。

まあ可愛いけど、男の子はそういうの喜ばないかもね。

それなりに返事をしたりするも茨丞はどこかうわの空、何か株式投資に役立ちそうなことはないだろうかと思い、今どんな商品が売れているのかとかどういう店の出店が増えているのかとかこのモールの建築はどういうところが手がけているのかとか不動産はどんな感じなのかとか、そんなことばかりへ頭がめぐる。

そっかなあ？

瑠慄は首をかしげつつもそれを買ひ物かごに放り込み、茨丞にも息子の靴下を選ばせる。

こうするとバランスが取れるでしょ、男目線と女目線から選んであげたらいいんじゃないかと思うんだけど。

なんだかよく分からない理屈に促され、茨丞は黒地に青い線が二本入ったデザインの靴下を選ぶ。

地味じゃない？ 子供は結構カラフルなやつとか喜ぶよ。

ふうん。

茨丞はうなずき、今度は黒地に太い虹色の帯が入ったやつをつかんで買ひ物かごに放り込む。瑠慄はそのチョイスには満足のいったようでもこりとして茨丞を見、あともう一つだけ靴下を選び始める。

ひと通り買ひ物を済ませた瑠慄と茨丞はフードコートで昼食を取りながら休憩をする。トレーの上のたいして美味くもないカレーをスプーンでつつきながら茨丞は周囲を見回す。フードコートの四分の三くらいのテーブルが埋まっていてそのほとんどは家族連れ、はしゃぐ子供に手を焼く親などもちらほらいて、茨丞は自分に子どもがいるというのはぞっとするような事実だなど改めて思う。隣のテーブルにはスウェット姿の若い男が携帯電話をいじりながらどっかり足を組んで座り、そこへ派手な化粧の女がハンバーガーとポテトを乗せたトレーを持ってやって来る。長い付け爪をした女が不器用そうにトレーを置くと男はばこんと音をさせて携帯電話を閉じ、さっそく手を伸ばしてわしづかみにしたポテトを口に運んでいく。茨丞が向き直ると瑠慄はテーブルにほおづえをついてスプーンをオムライスに刺したままぼんやりと周囲の家族連れなど見やっている。

いつも悪いな。

何か考え事をしている、その瑠慄の様子に茨丞はそれが自分のせいのような気がして、唐突な感じのすることを言ってしまう。

ん？

瑠慄はその言葉が聞こえていなかったようで、聞き返された茨丞が言い直すのを待っている。

いや、いつも借金とかさせてもらって世話になりっぱなしなのに、何も恩返しできてない感じだから、悪いなって。

瑠慄はうんとひと言うなずいて、とくに言葉を継がない。妙な沈黙、隣のテーブルの女がドリンクをすする音が飛び込んでくる。このところ会うたびに瑠慄は浮かない表情を見せるようになり、茨丞は口や鼻に綿を詰められそれを少しずつ水で濡られているような息苦しい後ろめたさを感じている。

今月はまあまあ稼げたんだ。この調子でさ、何とか勝率を上げて瑠慄に借りた金を返していくよ。

瑠慄はうんとひと言うなずいて、やはりに言葉を継がない。妙な沈黙、隣のテーブルの男がばかんと携帯電話を開く音が飛び込んでくる。瑠慄は何か言いた気な様子で目の前のオムライスにスプーンを刺して米とケチャップと具の中に紛れ込んだ言葉を探しているかのようにいじりほじくりまた埋める。茨丞は親に怒られる瞬間を待つ子供のように、ちょこんとして動かず伏し目がちに相手の出方を伺わざるをえない。窒息しそうな気分で、姿勢を正しゆっくり息を吸って、それが確かに肺の中に送り込まれていることを幾度と無く確認してからゆっくりと吐いていく。

ねえ。

瑠慄は言い、何かが見つかったとでもいうようにスプーンを垂直に抜き取って茨丞の顔を見る。平静を装う茨丞、心の中では密かに身構える。

茨丞はさ、ずっとそういう生活、続けるつもりなの？

思いのほかストレートにぶつかってきた言葉に茨丞はのけ反りそうになる。いずれそういうことを言われるということは考えていたものの、瑠慄は今まで茨丞のやっていることに口を出そうとして来なかったので突々と迫る態度に面をくらう。

誤解しないでね、もう止めてっていうんじゃないよ。私が言ってるのは現実的なことでさ、ずっとそんなのが続けられるのかってこと。

確かに、難しいよ。

上手く言葉が繋がらない、不要などぎまぎ、茨丞は追い込まれなくてもいいのに追い込まれて冷適な思考ができない。

ずっと続けたいの？

できれば。

でも、これ以上は私の借金には頼れないよ。玲だって育てなきゃいけないし、これから大きくなってくればいろいろお金が必要なことも増えてくる。

うん。でもな……

でも？

俺にはこれしかないんだよ。

元手になるお金がなくなったらどうするの？ その時は他の方法を考えるしかないでしょ。

そうだな。でも他の方法なんかないよ。俺には学歴も職歴もないし、特にアルバイトの経験が豊富なわけでもない。今さらまっとうな道に戻るなんて難しいんだ。

情けないこと言わないで。



強い語気、瑠慄の目はほとんど睨むようにしている。過度な感情を抑えてある分、反論の余地を許さない圧力を帯びる。

株ができなくなった瞬間に死ぬわけじゃないんだよ？ そんな不安定な仕事やってる以上、それができなくなったときのことはちゃんと考えとくべきでしょ。

苺丞はうなづく、うなずいてなお、自分がその言われようを受け入れられない気がして、じっと、心奥に閉じこもるようにしてうつむき考えている。

苺丞はね、大人になるべきだよ。

思わぬことを言われたように思え、苺丞は顔を上げて瑠慄を見る。それがほとんど睨み返すようになってしまったことに気付いて苺丞は視線をゆっくりそらして再びうつむく。

違うよ、定職を持つとか、そういうことが大人になることだとか言ってるんじゃない。世間様へ体裁を整えるとかいうのは大人になるってこととは全然関係ないの。そうじゃなくて、自分のやってることにきちんと責任を持つべきだってこと。

参ったな。

瑠慄はめったにこういう事を言わないので、詰め寄られた苺丞は半ば困惑しつつ苦笑いなどして頭を掻く。

ごめんね。

いや、いいよ。たぶん瑠慄の言うとおりで。

瑠慄はうんとひと言うなずいて、そこに言葉を継がない。妙な沈黙、ちょっとしたケンカのような調子になってしまい気まずくかつ恥ずかしかったが、隣のテーブルのカップルがいつの間に始めたのか瑠慄と苺丞以上の言い争いをやっていた。声は抑えてあるが語気は荒く、カップルは周囲のことなど全く気にかけてもいない。またまた妙な沈黙、瑠慄と苺丞は互いの顔を見て合わすと今度は二人そろって苦笑いなどして頭を掻く。一瞬の和らいだ間の訪れ、苺丞も思っていることを言いやすくなり、実は、と話を切り出し、そして舛治の持ちかけてきた一千万円による勝負のことを話す。

何それ？

和らぎなど嘘のようにつかの間、瑠慄は再び険しい顔になり苺丞を見る。

何って、確かにおかしな部分はあるけど、実際これはチャンスだよ。俺に残された唯一の可能性だと言ってもいいくらいだ。

おかしな部分？ 頭の前から尻尾の先まで全てにおいておかしなところしかないよ！ 何なの？

何であの人は苺丞にそんな大金を融通してくれるつもりなの？

分かんない。借金が一か八か返ってくるように賭けるつもりか、それと昔のよしみか、そんなところ？

賭ける？ あの人にとってその大金に見合うだけのメリットなんて全然ないじゃん。苺丞が下手うったら一千万円も損するんだよ？ それに、昔のよしみ？ もうあの人と苺丞とは疎遠になってるんじゃないの？

まあ、瑠慄の言うようにあいつが取るリスクに対するリターンは低すぎるよ。そんだけの金をリスクにエクスポーズするならいっそあいつが自分で俺の借金を穴埋めしたほうが良いくらいだ

でしょ？ 私ならそうするよ。絶対おかしい、何か裏があるって！ やめときなよ。

いや、やるよ。

はあ？

瑠慄は今にも怒り出しそう、あきれた顔で口を開きこんなアホがいるなんて信じられないとばかりに茨丞を睨みある種憐れむように眉をひそめる。

瑠慄の言うとおりに、このままこの生活を続けられるわけじゃないのは確かだ。でもな、俺は足を洗うなら洗うで、一度大きな勝負をやりたいてって考えてる。この勝負に勝てば、俺はまだまだやっていけるようになるし、逆に大負けして完膚なきまでに叩きのめされたなら、後腐れなくふんぎりをつけることができる。

ふんぎりをつけたらどうするの？ 仕事探して働くの？

.....そのつもりだよ。

茨丞は答えたが、その言葉をはっきりと口に出すには若干の間を要した。ただ追い詰められた状況から抜け出すには自分の窮状をいったん引き受ける以外になく、茨丞は行動に向けて身構えることを少しずつ始めている。

ちょっと自暴自棄になってない？

そんなことない、冷静だ。

自分にはこれしかないって思い込みすぎじゃないかな。その考えに今までも今もこれからも、ずっと縛られて追い込まれてるように見えるよ。

これしかないっていうだけじゃない、むしろこれでいきたいって思いのほうが強いのだ。

冷静なら私が今言ってることについてもちょっと考えてみてよ。今ならそんな勝負に乗って大きな痛手を負う前に踏みとどまれる。

繰り返すけど、俺は冷静だしよく考えてる。

ならはっきり言うけど、私は反対。

俺はやるよ。

瑠慄はあきらめため息一つ吐いて、そこに言葉を継がない。妙な沈黙、隣のテーブルのカップルがいつの間にかいなくなっており近周は静か、しかしフードコートの際では感極まりテンションぶっちぎりの子供の声らしいあーあーという叫びが響く。親たちは手を焼いて子供の昂りを鎮めようとするが上手くいかない。あー、あー。音がとてもうるさいので茨丞は顔を上げたが目に飛び込んだのは騒ぐ子供よりもさっきまで食べていたカレーの店のサイン、沸き立つようなしつこく目立たせることしか考えていない赤色が毒々しく不快で気分が悪くなりつい今しがた胃に入れた白い粒々と茶色い粘汁を吐き出したいような衝動が波打つ。妙な沈黙、妙な沈黙、あー、あー、二人は結局それ以上は何も言わない。

車など当然持ち合わせない茨丞をマンションに送り届けた帰りの車中、交差点の信号待ちで瑠慄は携帯電話を手に取りアドレス帳をスクロールする。茨丞の友人であるその男には、大学生

の時、たった二、三度、会ったことがあるだけだった。学生のノリで気軽に連絡先を交換したものの、以来一度たりとも互いに連絡を取ったことはない。瑠慄はずっと迷っている、茨丞の好きにさせておけばいい、とは思うのだ。しかし嫌な予感、水銀のような鈍色に光る冷たい液化金属の沼にぬぶぬぶと引きずり込まれているような不快な感覚にじわじわと冷や汗すら浮かび、瑠慄はその男の正体を突き止めるべく否応ない行動に駆り立てられようとしている。クラクション、短く一度、そしてもう一度長く背後から聞こえ、瑠慄は我に返ると信号が既に青転していることに気付く。携帯電話を助手席に置いた瑠慄は車を発進させにじんだ手の汗でハンドルが滑らないように固く固く握りしめる。今まで茨丞の周囲で宙吊りになり止まっていた物事が大挙する氷河の蠢流のようにぬったりと動き始めるように感じて瑠慄は身震い一つ、たぶんこれはもう同じところへは戻って来られないだろうと思う。ただそれが最悪の方向へは行かないようにとだけ願い、無駄でかつ余計なことだと知っていてさえ何か自分なりの行いをせずにはいられない。

不確実性の世界で生きる者は時には幸運にめぐまれ時には不運にみまわれ、一千万円の借金を抱えて賭けに出た茨丞の滑り出しは少なくとも幸運にめぐまれている。勝負を開始してからしばらく日経平均あるいは日本の代表的な企業の株価はじわじわとであるが上昇を続け、茨丞が買った株はほとんど例外なく利益を出していた。一方で世界経済の見通しの悪さを考えれば流れが変わる可能性も高く安心できるわけではない、茨丞は確保した利益を手放さないように注意深く神経質なほどに相場を見張っている。油断はできないのだ、舛治は確かに一千万円を貸出したものそこに条件の枷をはめてきた。出せる損失は三百万円、つまりそれだけの損を出した時点で茨丞はこの勝負を止めなければならない。一千万円とはあくまで元手の資金としての金であり舛治は茨丞に資金の三割という制限以上の損失を認めていないのだ。

三百万、それがお前の生命線だ。

提案に乗る旨連絡をした茨丞に、舛治は満足そうな笑いとともにもう言った。ひひ。なるほどそういう制限付きかと茨丞は内頷する、確かに一千万円をまるごと投げてよこすというのはやり過ぎだ。しかしだからといって額はやはり大きい、舛治の真意が図り得るようなヒントもなく、茨丞は結局ごまかせない不安を感じながら金を受け取ることになった。

まあいい、要は損を出さなければ良いんだから。

自らに独り言を言い聞かせ、茨丞は金を証券会社の口座に投入して勝負を始めた。3225、3235、3230、3240……

まだだ、まだあがる。

今回はその言葉の通り、パソコンの画面に表示された株価がじわじわと値を上げていく。3240、3235、3240、3245……相場は上昇ムード一色、有名な大企業の株ならほとんど上がっているという調子で、海運、証券、銀行、自動車、鉄鋼……、様々な業種の株価が順番待ちをしているかのように投資家たちの資金を吸収して膨れ上がる。茨丞は一週間で資金の五パーセントあまり、五十万円以上の金を稼いでいるがしかし茨丞は本当ならもっと稼げたはずだということを知っている。この勝負では損を出せないという恐怖が付きまとい、大きな資金を投じることができずにいるのだ。注文を出すたびに躊躇が生じ、恐る恐る、安全な膜に守られたような金額しか動かせない。こんな上昇局面であっても思い切りは乏しくチャンスを生かしきれずにいる。

くそ。

証券会社の口座に入っている金額を確認しながら舌打ち一つ、茨丞は着実に資金を増やしていることに安堵しつつもその程度の儲けで安堵を感じてしまう自らの弱さと臆病さにいら立つ。小さな勝利では駄目なのだ、今後もこの生活を続けていくためには、自分の決意を守り通すためには、この上ない完全な勝利を収めなければならない。五十万円とか百万円とかそんなレベルではなく最低でも五百万円、なるべく一千万円、できるなら二千万円以上でも稼ぎたいと茨丞は望んでいる。本気の勝負に出る必要がある、茨丞は豊富な資金を手にした時からずっとそのことを考えそして頭を悩ませている。今のように恐る恐る片足をしかもつま先程度つつ込んで投資をやっても罫がいつこうに開かず、この窮状から抜け出せる可能性は無し。チャンスが見えた瞬間に両足をそろえて飛び込んでいかなければならない、だから茨丞は昼も夜もおそらく寝ている

間もずっと株式市場について考えひたひたすらすらに勝機を伺い続けている。目の前の値動きや出来高、会社の業績、商品市況、経済動向及びそれを示す様々な指数、政治情勢、その他考えつくありとあらゆる情報を拾い集めて自分なりの分析を執拗に加えそこからとにかく何かを読み取ろうとする。茨丞は決定的な変化の兆しのようなものを探している、株価が上がるにしても下がるにしても大きな変動こそが勝負のときなのだ。物事についての完全な理解と予測など不可能、結局のところ可能性および期待値についてしか人間は考えることができない。世界は常に揺れ動き、仮にある瞬間の真実が存在したとしてもほんの小さな変化が影響してその真実を打ち砕き次の瞬間には別の真実が取って代わる。茨丞は株の世界で勝負をするたびにそのことを嫌というほど徹底的に疑いの余地もなく実感させられ、しかしそのことが腹立たしく、ほんのわずかな一瞬間におけるものでしかなかったとしてもそこにある最高の答えをただただ渴望して脳みそをかきむしるように考えを巡らす。

一日の取引が終わると茨丞は疲れ果てぐったり、何も手につかずに天井を仰いで呆けたようになっていたかと思うとくらのたりとよろめいてふとんに倒れこむ。敷きっぱなしでほとんど洗っていないふとんはやや湿っぽくかび臭いにおいがするのだがすっかり慣れている茨丞にはそれについてのお構いはない。憂鬱、ただどうしようもなく気分が沈んでいる。やがて、もしかしたら明日にでも、おとずれるかもしれない破滅が重い灰色の瘴気のようににじみだし床に広がり部屋に充満して天井から垂れ込め体を押し潰すようにのしかかりながら全身を取り囲みさらに口やへそから入り込んでくるような気がして、茨丞は怯え震え目を固く閉じ少しでも早く眠りにつけるように願う。神経が昂っているときはどうにも眠れずそういう場合は起き上がりキッチンに入ると料理など始める。できるだけ時間のかかる単純な作業をやっていたいと思い、ゴボウのさきがきやエビの背わた取りのようなことをゆっくりと延々と無心でやり続け没頭することで、すっかり興奮してそこらじゅうを跳ね回るバツタのように落ち着かない脳みそを落ち着けていこうとする。そうやって料理が出来上がる頃にはいくぶんか落ち着いて、パソコンの前に座って食事を取りながらまた株についての情報を拾い集めるが日本語で拾える情報だけでは不安になり、たいして得意でもないのに英語のサイトにも目を通してみる。とにかくやれるだけのことをやらないと気が済まない。一人孤独に部屋の中において株価の動きだけを見ているとそこに参加している他の投資家たちは自分がやっていることよりも遙かに質の良い情報を持っていてそこに精巧な分析を加えて作戦を練っており今この瞬間にも自分を欺こうとしているのではないかという気になるのだ。かと言え、どれほど質の高い情報を得てそこから何かを考えたとしても勝ちが保証されているわけではない。それは市場の参加者全員に当てはまることであらゆる努力のプロセスに関係なく、出てきた結果については誰も逆らえない。年齢、性別、人種、その他あらゆる条件に関係なく儲ける人間は儲けるし損する人間は損をする。茨丞にとってはそれこそが魅力であり、実際の市場そのものは不完全であったとしても、人間の生活社会などよりはるかに誰にでも平等に優しく平等に冷酷だった。言い換えるなら、市場はひとりひとりの人間の参加によって生まれていながら自らはひとりひとりの人間に対して無関心に駆動している。そこに金の流れさえあれば市場は生きるのでありその金の所有者の人格はいっさい無視される。茨丞はそんな無表情の化物である市場から何事かを読み取り勝負をかけなくてはならない。頼れるものは何もなく自分の

判断が全てでありそれゆえに常にそこには破滅の恐怖がつきまとう。

パソコンの画面をにらみつけながら苺丞は全く意識せずに手のひらを無精ひげに当ててじゃれるようにさする、ざりとした感触を予想していたが思ったより伸びていて手のひらにはいくらか柔らかいくにゃった感触が伝わる。へたするともう一週間ほど剃っていないかも分からん、苺丞は気分の転換にでもなればとヒゲソリをつかんで鏡の前に立つ。ひどく疲れた顔をした自分の鏡像を見つめながらもそもそとした緩慢で力ない動作でひげを剃り、皮膚が薄汚れた色をしていたのでついでに顔も洗う。冷たい水に顔を叩かれさっぱりとした苺丞は多少の活力が戻ったような気がして、鏡に向かって気合の入った表情など作ってみる。自分の表情をしげしげと観察しているとまともに鏡を見たのがしばらくぶりだったせいか右の鼻穴からカールした毛が出て、踊る道化師のような愛嬌ある跳ねかたをしているので指先でつつくとぴょんぴょんと弾む。こんな深刻な状況で自分は何をしているのかと苺丞はふと思ひそれが可笑しくなってくすくすと笑う。そんなことをしているとだいぶ気分はましになり、再びパソコンの前に戻るとさきほどよりはずっと前向きな気持で株について考えられるようになっていた。冷静になり考えを巡らせ最高の判断を下さなければならない、そのためには真面目すぎてもいけないし気を抜きすぎてもいけないのだ。苺丞は肩の力を抜いてもう一度チャンスを伺う作業に取りかかる。ともあれ勝利の可能性を信じるしかない、自分の全力を抱えて勝負できるような、来たるべき瞬間を苺丞はじっと待ち続けている。

昼のまどろみから目を覚ました瑠慄は窓からゆっくりとした動きで入ってくる風がぶよっとして柔らかく湿っぽいので雨が降っているんだなと分かる。雨雲が薄く小さいので陽の光が通って外は明るい。ほつほつと降るほんの小雨が薄紗のように風に揺れて濡れた草木の緑は宝石のように光っている。絵画のような風景に見とれていると現実を忘れふっとここから離れてしまいそうになるが、横で眠っている玲の寝息が聞こえてきて瑠慄はそちらに視線を落とす。玲は風邪を引いており瑠慄はその看病をしながら本を読んでいるうちにどうやら自分も眠ってしまったらしかった。枕元の本は読んでいたページで開いたままうつ伏せになっており、瑠慄は本を拾い上げそこにしおりをはさむと静かに閉じて部屋の隅に置き直す。熱を出した子供のそばにいと体温やにおいが感じられ、ごろっとした現実感の塊のようにそれはベッドに横たわっている。玲の額をそっとなでてみると汗でじっとりべたついて、瑠慄は水で濡らしたタオルを絞ってくると優しくふいてやる。眠っていてもその感触が分かって心地良いのか玲の寝息はだんだんと静かになっていく。

落ち着いた玲を横目に瑠慄はキッチンに入って蛇口をひねりコップ一杯に水を貯めるとそれを一口飲み、灰丞は上手くやっているのだろうかと考えてみる。望みは薄いような気がする、今まで上手くいかずにきわどい借金生活をすれすれでやっていたような人間が大きな資金を得たところで急に事態が好転するものだろうか。ただ、上手くいってもいなくてもこれで良いのかもしれない。灰丞が今までのような生活を続けるなら瑠慄はこれ以上借金を融通してやるつもりはなかったし、それと同時に灰丞との関係も終わらせる決意をしなければならぬかもしれないとも思っていた。どっちにしても節目は来ていた、ただ今回のことでそれが自らの手をわずらわすことなくはっきりとした形で表れたまで。だから今瑠慄が考えているのは、灰丞がこの勝負に負けて今まで以上の借金を抱え込んだときにどうするのかということだ。灰丞が上手く金を稼ぐことができたならこれまで貸した金も戻ってくるし、灰丞が不安定な株式投資生活をまだまだ続けていくということを除けばあまり問題はない。しかし灰丞がそれに失敗すれば瑠慄には差し伸べる手はなくて、灰丞には自分だけでその責任を負ってもらうことになる。二人は夫婦ではないのだから縁を切るのはさほど難しくはない。灰丞は独り者のようにふわふわと生きているが、瑠慄は自分の子供を育てなければならないということがまず先に浮かぶのであり、灰丞などよりずっと物事についてシビアになる必要があると思っている。借金を抱えた定職のない男を放り捨てるのはちょっと冷酷な感じもするがしかしおそらく自分はそれをすべきだろうと瑠慄は幾度となく自らに対して頷いてみる。

部屋に戻った瑠慄の正面、窓の外では雨が降っている。雨雲が薄く小さいので陽の光が通って外は明るい。ほつほつと降るほんの小雨が薄紗のように風に揺れて濡れた草木の緑は宝石のように光っている。絵画のような風景に見とれていると現実を忘れふっとここから離れてしまいそうになるが、現実感の塊としての玲はあいかわらずそこで寝息を立てている。何かを実際に決めるのは灰丞が結果を出した後になるだろうしその結果について影響するようなことを何か自分ができるわけでもないが、しかしただただそれを待たされる立場に置かれるというのはあまり愉快ではない。だからせめて金の貸し手である舛治の真意を探るということについて考える、灰丞には

それを探り通すという気はないようなので瑠慄以外にはそれをやる人間はいないのだ。しかし実際に何をすればいいのかという段階になるとどうにも頭を悩まされる、舛治には大学るとき以来会ってはいないのだし交友関係はおろかどこに住んでいるのかさえ知らない。となると唯一の糸口は携帯電話に残っている番号のみ、瑠慄はその画面とにらめっこを幾度も繰り返しながら未だ決心らしきものがつかずにいる。

いつの間にか玲が起きていて瑠慄の顔をじっと見つめていた。不思議そうな表情、そこで瑠慄は自分がとても思い悩んだような顔をしていることに気付きあわてて取り繕うようにほほ笑みを作り玲に返す。少し安心したような顔になった玲に熱で失った水分を補給するためにジュースを飲ませる。少し気分が良くなったらしく玲は起きて動きたそうにしているが瑠慄は濡れたタオルでその汗ばんだ体をふいてやりながらそれをなだめ、まだまだ横になっているように促す。玲は少し不満そうだったが風邪で体力を消耗していたのか瑠慄に言われて目を閉じると、だんだんと静かになっていきそのうちまた眠りに落ちる。部屋が静かになりこのままだとまたいろいろ考えてしまいそうなのでシャワーでも浴びて気分転換をしようと思い瑠慄は立ち上がり部屋を出て行く。玲の寝息はとても小さく、外を降る雨音のほうがかはっきりと耳に響いている。

シャワーを終えて浴室から出た瑠慄はいくらかましになったとはいえそれでも晴れない気分のまま体をふく。結局ずっと茨丞のことについて考えるばかりで何も考えが進展せずだんだんといらいらした気分さえなってくる。一つ短くため息、しかしふとした拍子に洗面台の鏡の下に置いてあるリップスティックが目が止まる。じっとそれを見つめてから何の気もなしにそれを手に取った瑠慄は軽く唇の真ん中に塗ってみる、すると不思議と気持が落ち着いていくような気がして、今度は人差し指を使い唇全体に紅を広げて塗っていく。うっすらとした赤が乗った唇はとても健康的な色で鏡に写ったその姿を見ていると何か自分は大丈夫だという気になる。瑠慄はほんの遊び心で指先に残った紅を鼻の頭にも塗ったりして、その姿がおかしいと思い笑う。たったそれだけのことだったが瑠慄は妙に落ち着いた気分になってきていた。あるいはもう少し前から答えは出ていて、必要なのはふとしたきっかけになるようなものだったのかもしれない。

瑠慄はその格好のまま居間に行って携帯を手に取り舛治へ電話をかける。茨丞にゆだねるしかないことは茨丞にゆだねて自分は自分のことをするつもりだった。窓の外では雨が降っている。雨雲が薄く小さいので陽の光が通って外は明るい。ほつほつと降るほんの小雨が薄紗のように風に揺れて濡れた草木の緑は宝石のように光っている。絵画のような風景に見とれていると現実を忘れふっとここから離れてしまいそうになる、しかしそのとき、携帯電話から聞こえてきたのはあまりにも生々しいやらしさを帯びた舛治の声だ。

もしもし？

携帯電話を持った右手から思わず力が抜けそうになったのを支えるように瑠慄はそこへ左手を添える。自分から電話をかけたのに瑠慄はすっかり驚いてしまって、うっかりするとこのまま電話を切ってしまうようになる。

もしもし。

無理に気持ちを落ち着けるようにしたので不自然なくらいに低い声が出る、しかしもう後には引けない、瑠慄は何とかそこに言葉を繋げていく。



驚いた？ 急に私から電話するなんて変な感じだよね。

一瞬の沈黙、だがすぐに聞き覚えのある、しかし昔とは全く違うような暗く腹の底の知れない雰囲気を感じた声が返ってくる。

そうだなあ。もう何年ぶりか分からないし、それに、俺達が電話で話すのは始めてじゃないかな。

そうだね。私もちょっと変かかって思ったんだけど、ちょっと訊きたいことがあるんだよね。

へえ、訊きたいこと？

電話の向こうから小さく、笑い声。ひひ。こちらの考えていることを見透かしているような調子に、瑠慄は自分が手玉に取られているような気がしてふっとさざ波のような鳥肌が立つ。

そう、茨丞にお金貸したでしょ？ そのことについてなんだけど。

瑠慄は真正面から質問を投げかけた。結局それが一番良いという考えからしたことでもあったが、それ以上にこの会話をすぐにでも終わらせたいという気持ちからだというほうが大きな理由だ。電話の向こうの舛治の声を聞いているだけでとても嫌な予感に襲われて不快になる。一方の舛治はその瑠慄の不安をもてあそぶようにたっぷりとした沈黙の間にはさみながらじっくりと何かを考えている。

確かに貸したよ。それがどうかしたのかい？

単刀直入に訊くけど、何でそんな大金を茨丞に貸したの？

舛治はそれに沈黙を返す、解答に困っているというふうではなくむしろ意図的にそうしている気配がする。

あいつが借金を返せるように便宜をはかったのさ。

でもそんな大金を貸すだけのリスクには見合わない。

なるほど。

そして舛治はまたいっそうのたっぷりとした沈黙を置いてくる。灰色の泥に覆われた沼のような沈黙に飲み込まれそうになりながらも、瑠慄は身構え相手の言葉を待ち受ける。

そうだなあ、じゃあこうしよう。

舛治は今度は沈黙の代わりに笑いを置く。ひひ。瑠慄は相変わらずもっと力を込めるようにして次の言葉を待ち受け身構えるしかない。

直接会おうか。俺が何を考えているのか話してやるよ。

その舛治の言葉は予想もしていなかったことで、瑠慄は思わず身震いして上手く答えることができない。ひひ。ひひ。ただ電話の向こうから笑い声が聞こえるばかり、瑠慄は粟立つ肌をさすりながら凍りつくような沈黙に耐えている。ただ怖気付いたりせぬよう冷静を保つことに努めその提案に乗るべきかどうかを沈黙を挟みながらじっくりと考える。

ぱったり、茨丞はこの数日の間株の取引を止めてしまっている。勝負を始めてから一週間で稼いだ五十万円はその後の三日で消えてしまい今の資金は元の一千万円に戻っている。株から遠ざかったわけではない、茨丞は今まで以上に市場を注視、同時に様々な情報を拾い続け、しかし持株は全部売って整理してしまい、それからいっさいの売買をしていない。五十万円の儲けが消えたとき茨丞がひとつ気付いたのは自分が今までと全く同じようなパターンで勝負をしているということだ。このままでは資金は増減を繰り返し利益が出るかどうかは運に左右されてしまうだろう、そう考えたとき茨丞は鉄槌のような危機感に襲われ全身の骨がぎしぎしと震え痛むような感じがして怖くなった。茨丞は自分でもよく分かっている、今まで自分がここから抜け出せなかったのは資金の大きさのみならず自分のやり方が何か間違っているせいなのだと。今までは少ない資金からどうにか生活費を捻出しなければならずそれを冷静に考え直す余裕がなかった、だからこのチャンスが本当にチャンスになり得るのは茨丞がその問題を解決することができるかどうかにかかっている。今までと同じやり方をしているのはだめなのだ、根本的に何もかも変えなければならない、全く別人のように全く新しい人間のようにやらなければならない。よほどの幸運に恵まれてもしないかぎり同じやり方は同じ結果に結びつく。しかも単純に奇抜なやり方をすれば良いわけもなく、それが同時に考える最善のやり方であるような、そういうやり方を茨丞は目指す必要がある。とはいえそんなにうまいやり方が簡単に見つかるわけもない、しょせん頼りになるのは自分の経験とか知識といったものしかなく、だから茨丞はせめていくらかの確信が持てる瞬間を待って取引をひかえることにしたのだ。売買に参加したくなるスケベ心を必死で自制しながら無数の銘柄の値動きを苦悶する羅刹のような形相でにらみつけ、今の自分にできるのは安易な結論にながされずに往生際悪いくらいしぶとくしつこく考え続けることなのだと自分に言い聞かせ茨丞はひたすらにもがく。無性のいら立ちは抑えきれずとめどなく、握るマウスはぎぎぎ、ぎぎぎ、とひねり潰される数匹の甲虫のような鳴き声を出す、実のところもうすでに際限ない怒りが暴発して二つも三つもマウスを壁に叩きつけてぶっ壊している。

正直なところもしこの勝負に負けて全てを失ったとしても溜慄に宣言したように自分が素直に働きに出られるかどうかは分からない、茨丞は床と壁にすっかりこびりついたリンゴの残骸を掃除しながらそう考える。それは自分自身に対して不実で無責任なのではないか、自由を放棄し意志や欲望にそぐわないことをする生き方をするというのは。どこかの集団に属してサラリーマン的に生きるのがだめだという意味ではなく、自分に充実感を与えてくれるものを手放し、ただ無抵抗に生活という言い訳のもと、不自由に耐えることが何か価値のあることだというこじつけを信奉してはばからないというのはどうしようもなく無責任だ。そこに充実感を得られそうもない自分のような人間はきっとそういう言い訳の中で生きて行くことになるだろう。茨丞は責任を負うつもりでいる、意思や選択を絶対に他人へゆだねないという自らに対する責任。多く人はむしろ自ら望んで自由を捨てる、茨丞のように生きようとするのは苦痛をとまなうからだ。茨丞は全てについて自分の意志のもと自分で決断を下さなければならない、ほとんどギャンブルにしか見えない不確実性の地獄のような株式投資の世界で自分だけの確信にたどりつこうと苦闘するのと同じように。その地獄を、大洋のごとく広い荒野の上を裸で独歩するかのよう、茨丞は一身に引き受けようと思っている。いかなる集団の一員でもなく、いかなる名前すらも持たないかの

ように、ただ自らだけを意志と欲望の源泉として、荒野の上の一滴の水のような自由を、その手で振りかざそうというのだ。いかにも大げさな考えのようだがこんなことが大げさに思えるというのは今日の人間がいかにも奴隷的な生を当然のものとして受け入れているかということの証左でもある。いったどれほど膨数の幼稚な人々が、成熟への意志を持つ人々を逆に幼稚だと倒錯していることか。そんなことなどもの思いして茨丞はリンゴの残骸をふき取ったタオルをなんとなしに鼻に近づけにおいをかぐ、その酸臭が思いのほか強烈だったので鉄棒で喉を突かれように激しく咳き込む。そのにおいがねっとり鼻や喉の奥に貼りついているような嫌な感覚を消すために茨丞は机の上に置いてあった飲みさしのコーヒーをあおりひと息、ふと部屋を見回すと今まであまりに株にかまけていたせいで全く掃除をしていなかったのとんでもなく汚いことに気付く。猫の集団がケンカをしながらあちこち跳ね回っていたかのように床には物が散乱して、拾いあげてみた本の一冊はホコリが積もって白んでおり表紙の上にもう一枚ホコリのカバーをかけたかのようにさえ見える。そほりそほりと、茨丞が本の表紙の上に親指の腹を滑らせると表紙には遙道のような一弧の曲線ができた。それを目の高さで水平に構えて意味もなくじっと眺めてから、茨丞は思い立って部屋の掃除を始めることにする。窓を開けて外の空気を入れホコリを払い床にぶっ散らかる物々を拾い上げひとつひとつよごれをふきながら整理していく、連日株のことばかり考えていて蒸発しそうなくらい煮つまった頭をクールダウンするには丁度いい作業で、茨丞は黙々にして没頭する。気がつくともう夜になっているくらいだったが、しかし部屋はまだまだ散らかりと汚れがひどいもので片付いたということなどとてもできないくらい。

以来茨丞は掃除を日課の一つにする。株について三八時中考えて脳みそを焼けるくらいに追い込みながら取引の行われているザラ場を観察し終わると、いくら片付けても片付け足りない部屋をあちらこちらと掃除していく。自分の命運を分ける勝負の最中だと思うとプレッシャーとか憂鬱が大きく重苦しいのだが、そういうふうにしてしていると気分転換できるのか少しはましな気分になる。そして数日を経過、あいかわらず茨丞はいっさいの取引をしていない。自分が求めているようなチャンスが本当に来るんだろうかという思いがときどき頭を埋め尽くして焦りが湧いてくることもあったがしかし茨丞はひたすら忍耐強く冷静になることに努めている。

一夜経て一昼経てかくてまた一夜経てを繰り返すうち、部屋はとことんまできれいに片付き掃除するところがあまりないくらいになり、一方で偏執的に観察し続けた株価の値動きは頭にこびりつき目に焼きつき何も見なくても諳書できるくらいになっている。茨丞は文字通り何かに憑かれたかのようにあるいは単純な機能を繰り返す機械のように、それでも飽きもせず手を抜きもせずますます偏執的に同じ日課を連徹していく。

小刻みに震えるように上がって下がって、じりじりと、上がって下がってを無限に反復しながら全体的に株価は上昇を続けていた。数カ月前の底値から比較して、日経平均はおよそ二割近い上げ幅を見せている。この上昇に乗ればそこそこの利益を稼げていたはずだが全く取引をしていない茨丞は当然ながら何の儲けも手にしていない。しかし茨丞はそれを平然として見送るようにしている、求めているのはほんのわずかな勝った負けたのレベルではなく完膚なきまでの勝利と

しての莫大な利益なのだ。

一つの機械のように、苺丞は値動きを観察している。株価は毎日似たような上げ下げを繰り返して多くの人間にはそれが全くありふれた常態にしか見えないだろうし、苺丞にもやはりそうしか見えない。ただ、苺丞は徐々にではあるがその値動きに奇妙な兆候を見出し始めている。それは最初、気をつけていないと意識に上らないくらいの小さな小さな亀裂のような違和感として突然脳裏にひらめいたに過ぎなかったが、みるみるうちに膨らんでいったかと思うと他の考えを全て押し出してしまうかのように苺丞の頭の中を占拠している。苺丞はその違和感について自分自身に対してさえ上手く説明できない。それは強迫的なくらいに値動きを観察し続けてきた成果として得られた直感としか言いようのないものでそれを信じていいのかどうかという迷いを生じさせるあいまいさを含んでいる。数日前から有力な企業の株価上昇の勢いが弱まっており、その横ばいに近い動きの震えは何かがおかしいという違和感を苺丞に生じさせるような今までに見たことのない動様をしている。意識の底から上ってきたそれはあまりにあいまいで輪郭に乏しく次の瞬間には霧散してしまいそうなくらい。目の前でぐるぐると回転するように光りながら動く数字を見つめ、指先はせわしなくもどかしく行きつ戻りつ苛立って握ったマウスの表面を揺れる。

もし、これから何かとんでもない変動が起こるとしたら？ 苺丞は確信を求め自分に問いかけ続けていたが、それはどうしても不確実で可能性の範囲を超えて来てはくれない。苺丞は画面をにらみつける目に力を込め、そしてマウスの上で憐れな迷子のようにたどたどしく揺れ動いていた指をぴたりと止める。自分の直感を信じることにしたのだ。五百万円、それが苺丞の手によって最初に勝負に投げられた賭金、もはや一毫の迷いもない動きで苺丞は往年の日本を代表する大企業の株に向かって攻撃的な空売りをしかけ始める。トヨタ、ソニー、野村、三菱UFJ、新日鉄... 苺丞は日本の株が大きく下落するほうに賭け、確信よりも早く行動に移していく。借りてきた大量の株を売っておき、下がった後に買い戻して返却すればその差額がまるまる自分の利益になる。空売りを仕込んだ株の中には苺丞をからかうようにじわり上昇するものもあったが苺丞は全く動じない、その上げ方は弱々しくしかも違和感を増大させるような値動きを見せ続けていたからだ。それを根拠づけるような、何らかの可能性について苺丞は考えを巡り巡らす。市場においては常にいくつかの潜在的な可能性が奥底に渦巻いている。その可能性は参加者たちの強いバイアスによって無視されることもあれば過剰なバブルやカタストロフに化けることもある。全ては起こり得るし、ややもするとほぼ確実にいつか起こると皆が考えているようなことさえある。しかし誰にも分からないのは、それがいつ起こるのかということだ。徐々に意識に上る何かのように、ある日突然閾値に達して、現れたその時にはすでに誰にも手に負えないような怪物になっている。

で？ 俺があいつに一千万円もの金をハイリスクローリターンで貸すのがおかしいってことか。

うなづく瑠慄の目の前、舛治は笑う。ひひ。

つまり、俺が何を考えているのか分からない。そういうことだな？

再びうなづく瑠慄の目の前、舛治はさっきより高くて大きな声で笑う。ひひ。ひひ。夕方、客の少ないファミレスの中でその音はよく響いて、大学生のアルバイト店員がくるっと振り向いて首をかしげる。嫌な笑い方で、首筋のあたりを大きな犬の濡れた舌でべろりとなめられたように不快な気分になる。粟立つ肌をシャツの上からさすり、いったい昔からこんな笑い方をする男だったのだろうかと思いながら瑠慄は正面の席に座る茨丞の旧友を見る。舛治はタバコのやにが染み込んだように黄ばんだ眼球の灰色の瞳で瑠慄を見返す。鳥のペニスくらいの長さになったタバコから煙くゆらす舛治、その優位をじっくりと味わい楽しむかのように目を閉じて笑っている。夕暮れの中で煙は赤みを帯びて広がり消えていく。

人生ってのは分かんねえもんさ、俺と、茨丞の人生ってのはくるっと入れ替わっていたかもしれない。

舛治はもったいつけたかのような思わせぶりなこれから何か重要な告白を始めるというような態度で、同時にしかししかし当たり障りないくだらない話を始めるような声の調子で話を始める。

どうということ？ それが大金を融通したことと何か関係あるの？

瑠慄はできるだけ早く答えを聞いてすぐにでもその場から立ち去りたいと思い回り道をせず核心に迫ろうと話題がそれないよう真っ直ぐそこへ運ぼうとする。その瑠慄の落ち着きない様子を見透かして舛治はまた笑う。ひひ。

関係あるのかもな。まあ、焦るなよ。

できるだけ手短な答えが欲しかったから。私、この後ちょっと用事があるし。

へえ。

本当は用事などない瑠慄、それをやはり見透かしているかのように舛治は適当なあいづちを一つ。テーブルの上、二人のちょうど真ん中に灰皿が置かれていて舛治はその中に吸い終わったタバコをもみ消さずにぽんと投げ捨てる。吸殻からはクモの糸のように細い煙条がすうっと立ちのぼり二人の目の高さでほどけて消えていく。

あいつが、茨丞が投資でやっていこうと思ったそもそもの出発点の話だ。俺とあいつは二つの銘柄を候補に選んで、二人でコインをトスしてどっちがどっちの株を買うか決めたのさ。どちらも順調に値を上げていったけど、俺の買った方は突発的な事件でゴミになった。あいつの株も下げたんだが、ちゃっかり売り抜けて手元に大きな利益を確保してやがった。あいつはそこで稼いだ金を元手にして本格的な投資生活に乗り出したんだよ。

茨丞が大学生の時に買った株で大金を稼いだのは私も知ってる。

瑠慄はまだ話を早く進めようとしている、だがそうするほどに舛治は自分の優位を楽しむかのようにますますもったいつけた風な態度になる。

いまだに、奇妙な感じがするんだよ。あの時コインの裏表が逆に出たら、俺があいつみたいになってたかもしれないし、あいつが俺みたいになってたかもしれない。

どうかな、茨丞はあんな感じだし、もし株で損してたととしても素直に就職なんかしてたかどうか。

そりゃ俺も分からんけどな、あいつが投資でやっていこうなんて考えられたのは成功体験があったのと金に余裕があったからだろう。金を稼ぐ必要性に迫られたなら、どんなにカッコつけた人間でもそのために動かざるを得ないんだからな。

あなたも金に余裕があったら自分が茨丞みたいな生活始めてたと思う？

さあねえ。本当のところはどうだろうな。ただ少なくともあの時俺には金がなかった。そして今となっては俺が茨丞の境遇だったらどうしたかなんて知るよしもない。

結局、それが茨丞に一千万も貸したこととどう関係あるの？

瑠慄はどうにも辛抱強く解答を待てない。舛治はその瑠慄の態度を気にも止めようとしないで次のタバコに火を点けている。黄ばんだ眼球の灰色の瞳、ぐとぐとしく揺れて縮み瑠慄を見ている。

気持ち悪いのさ。自分が偶然とか運命みたいなものに翻弄されてるような気がしてな。それに比べて、あいつはとても自由に生きてる感じがする。借金まみれで、きわどい生活を送ってるのに、あいつのほうが俺よりマシな生き方をしてる気がするんだ。

あれはそんないいもんじゃないと思うけど。

そう、ろくなもんじゃない。だから奇妙なのさ。不安定でいつも追い詰められてる、俺は金を貸す立場で、変な話だが常に優位に立ってる。それなのに、だ。俺はいつも、俺があいつのようであるべきだったんじゃないのかという風に思えるのさ。

変なの。悪いけど。変だよ。

確かにそうだ。

だってさ、あなたが茨丞みたいな生活を送りたいなら簡単にできるじゃない。今すぐ会社を辞めて、ああいう生活を始めたらいい。もしかしたら会社を辞める必要すらないかもしれない、それでも似たような生活はできるんじゃないの？

舛治がうなずく、そのたびごとに一つ、一つ、鼻から煙が漏れる。ぐと、ぐと、黄ばんだ眼球の灰色の瞳が揺れてから大きく動き出しそれが空間をぐるりと囲い込むように天井を仰ぐ。

それが、できないのさ。

できない？

そもそも俺がああいう生活を送ろうと思うに十分な動機がない。今の俺の生活は別にたいして良いもんじゃねえよ、でもな、あいつのそれよりは良いはずだ。

さっき言ったことと矛盾しない？ 茨丞のほうがマシな生き方をしてるような気がするって言わなかったっけ。

気がする、ってだけさ。普通に考えたらあんな生活ろくなもんじゃない。感情の部分ではあいつのほうがマシな感じがしてても、いったん考え出すと検討にも値しないような話でしかない。俺があいつみたいな生活を送るってことに対して全く想像力が働かないし、だからそこには実行力も伴わない。別の生き方ってのはそういうところがあるだろ？ 頭の片隅にしつこく居座り続けるのに、それは現実的な選択肢というレベルまで全く到達してこないんだ。あり得たかもしれない

ない、でも実際にはあり得ない。

そんならいいじゃない。選択肢でないなら悩む必要もない。

そうだ。別に悩んでるとかいうのとは全く違う感覚だ。でも何度も言うけど奇妙なのさ。今の俺にはあり得ない、しかし過去の時点ではあり得たかもしれない。それらはほんの偶然みたいなものの力で隔てられ分岐して戻り不能な所まで進んでしまって、俺はそのことによって翻弄されてるように思える。

やっぱり分かんないな。それが茨丞に大金を貸すことと何と関係があるの？

瑠慄は舛治の話に一応付き合うようにしてみても話が全く核心へ進まずしびれを切らして、あきらめ悪くどうにか最短距離でそこへ辿り着こうと試みる。ぐと、ぐと、黄ばんだ眼球の灰色の瞳が揺れてから大きく動き出しそれが空間をぐるりと囲い込むように天井を仰ぐ。

憎たらしいんだよ。

舛治はそう吐き捨て、笑う。ひひ。

憎たらしい？

はっきりとそう意識してるわけじゃねえんだ、もしかしたらってことさ。

なぜ？ 茨丞があなたの不興を買うようなことを何かしたっての？

何も。たださっきも言っただろう。あいつは自由に見えるんだ。自分の裁量が自分の運命を左右する、そういう境遇だ。これが例えば俺みたいな人間は、どっぷり社会や組織といったものに埋め込まれて生きていて、ひと度自分を俯瞰して見てみれば驚くほど小さな裁量だけしか手の中になんかいてことに気付く。自分の裁量以外のものが自分の運命を左右するのさ、組織とか社会とかの方針、変動、システム、それらが何重にも自分を取り囲んでる。俺は今なお、あの時と同じように、自分の手の届かない、ほとんど偶然に近いような力に翻弄されているんだ。つまり不自由なんだ。よく分かる話だろう、不自由な人間は、心の奥底から、そしてその心の全体で、自由な人間を憎んでいる。

世の中に自由な人なんてそうそういないと思うけど。茨丞なんか自由じゃないよ。無責任でいかげんなだけで、何よりお金に翻弄されてる。しかも株やってんだよ？ あなたなんかより遙かに理不尽な偶然に左右されて生きてる。

それでもあいつは偶然性に挑むことができている。そこが例えば俺のような人間とは違っている。不確実性ってのは恐ろしいもんさ、だから人間は集団や組織や社会といったものをより強固に練り上げて、確実性の壁を築き上げるんだ。不確実性を外部として排除しつつ、確実性を内部として集密する。ただ、その確実性が高まるほどに集団は強固になり、人間はその自由を失っていく。ところがだ、連中はしかし自ら望んで自由を放棄するのさ、不確実性が怖いからな。

それってそんなにいけないこと？ だって不安定な生活なんて嫌じゃない。みんなそのくらい自由を切り売りすることに納得してやってるんだと思うよ。

良いとか悪いとか、そういう話じゃない。それに、おそらく連中は納得できていない。だから自由な人間が憎いのさ。あいつのような不確実性と戯れて生きられる人間がいるという事実は、そこに不確実性が存在するということと確実性の壁の中に引きこもろうとする人間の無能さと臆病さを突き付けてくる。連中はむき出しの現実が怖いんだ。普段は確実性の壁に守られている

けど、社会の外部には洪水のような不確実性が氾濫していて、何かのきっかけで壁が崩れたら連中はあっさりと押し流されるだろう。そんな時に不確実性を乗り越えて生きられるタフネスを持った人間がいるなんて考えたくないんだよ。自分が苦しむ時は、破滅するときにはみんな一緒がいい、そこから自由になり得る人間がいるなんていうのは不正でありルール違反。それが不自由で無力な人間の思考だ。

瑠慄は舐治を見る、タバコのやにが染み込んだように黄ばんだ眼球の灰色の瞳、瑠慄を見返す。古い油のように粘性のあるぬるぬるしさを持つ目には、瑠慄が思っていたよりも理知的な光があり、それがいっそう舐治の存在に濃い靄を漂わせて真意を読み取りにくくさせる。

ずいぶん冷静に分析できてるじゃない。そんだけ自分の境遇が理解できてるなら、それをどうにか変えていくことも可能なんじゃないかって気がするけど。

できないんだよ。

何で？

舐治は苦々しくもまだ余裕を残して笑う。ひ、ひ。

世の中には頭のいい人間なんていくらでもいる、でも頭の良い人間が必ずしも自由になれるわけじゃない。それどころかなまじ環境への適応力が高いだけに不確実性から遠ざかり、とうとう身動き出来なくなる人間が多数派だ。

あなたもそうだってこと？

俺？ そんなに恵まれてはねえな、たいして良い仕事にありついてもいない。でもそこそこには確実性の壁の中で生きていられる位置にいて、そこから出ることもできない。だから結局、俺は自由な人間を憎む側の連中の一人だ。

そこまで自覚できてるのに、それでも憎むんだね。

瑠慄はそう言いながら、強い嫌悪感があふれてきて思わず顔を伏せて舐治と目が合わないようにする。

自覚があるからなお憎い。しかも、そう、しかもだ！ 俺とあいつはそもそもの始めにおいて、全く逆の立場になり得たかもしれない。あんなつまらない賭け事の結果ひとつで。その事実、いっそう俺の憎悪はかき立てられる。

それが茨丞にあんな金を貸した理由？ 勝負に負けてそれがまるまる借金になれば、茨丞はその自由らしきものを捨てないといけなくなるから。

くだらないと思うか？

くだらない、正直ね。言わせてもらうけど、そんなことしても無意味。この賭け事はもう終わり、私が説明してあげるから茨丞に貸した一千万円を引き上げようよ。

そりゃあ無理だろ。

無理？

考えてもみろよ、俺はもうこれ以上あいつに金を貸すつもりはないぜ？ あんたもあいつのおもちゃにしかならないような金をこの先ずっと貸し続けていくことなんてできない。そして何より、あいつが必要としてる金だ。借金を増やすにしろ減らすにしろ、これ以上ドロ沼にはまらないためには、あいつがこの勝負で結果を出すしかない。それに俺にメリットがないってあんた



は言ってたけど、あいつが負ければ俺は自由な人間の姿を身近に見なくて済むようになる。あいつが勝てば正直面白くないが少なくとも無理して融通してた金が返ってきて会社にならまれずに済む。どっちに転んでも俺はある程度すっきりするのさ。誰もこっから降りられない。勝負はすでに始まってるとし、いやがうえにも結果は出てしまうよ。

また顔を伏せた瑠慄、深く長くため息をつく。

芡丞はこの勝負に負ける可能性のほうが高いとあなたは考えてる、そうでしょ？

舩治はその問いにただ笑って答える。ひひ。ひひ。

芡丞の勝ちと負け、あなたはどっちを望んでるの？

さあねえ。

瑠慄はこちらの顔をのぞき込むように視線を低くしていた舩治と目が合う。その様子から舩治が本当はどちらを望んでいるのかを読み取るのは簡単なことだった。舩治はすぐに視線をそらす、ぐと、ぐと、黄ばんだ眼球の灰色の瞳が揺れてから大きく動き出しそれが空間をぐるりと囲い込むように天井を仰ぐ。

不穏な気配、値動きを観察する茨丞は日増しにその直感を確信に変えつつある。株価は徐々に上昇を止めて横ばいを始め、茨丞はそこにさらなる空売りを叩き込む。すでに賭金の額面は一千万円を超え、茨丞は元手になる金の価値以上の株を信用取引を使って調達して空売りを重ねレバレッジをかけていく。茨丞は取れるだけのリスクを取るつもりでいるが一発当てようと熱くなってギャンブルをやっているつもりは微塵もない、頭の中は今まで経験したことの無いほどに冷静で確信に満ちている。その瞬間がいつ来るのかは分からない、しかし近くかならず来るそれについての予感の水の中に落ちた絵の具のように茨丞の意識に飛び込んで徐々に現実味を帯びて広がっていく。確信に満ちた判断、ルーレットの前に賭金を置くのではなく、チェスの盤上で最高の一手を指すように茨丞は賭金を置いていった。

週末、その週の最後の取引が始まった朝、茨丞の目の前で株価は久しぶりの上昇を始める。しかし茨丞は動じることなく値動きを観察し、同じように日本の大企業目がけて空売りを叩き込み続ける、しかもそれは今までよりもずっと猛烈な勢いによってだ。茨丞は敏感に相場の不穏な気配を感じ取り、その上昇が、何という根拠もないわついたお祭り騒ぎのようなものでしかないと見抜いている。茨丞は今まで何度も何度も叩き壊してきたマウスの上にそっと手を置いたままパソコンの画面を見つめ、だんだんと大きくなりすぐそこまで迫ってきている怪物の足音に耳をすます。

地獄、その瞬間は後場の取引が始まろうとする昼過ぎの時間帯に現前する。いろんな銘柄の取引開始前の様子をチェックしていた茨丞は、今まで空売りを仕込んでいたような大企業の株に大量の売り注文が集中しているのを見つける。そしてその売り注文はみるみる増加し続け、とうとう取り消されることなく取引が開始されてしまう。それと同時に今までゆっくりとしたカーブを描いて上昇してきた株価が理不尽なくらいほとんど垂直に落下していく、誰もが目の前の出来事に冷静な判断を下す猶予を与えられず、それはただただ勢い止まらず凄まじいスピードで崩壊する。一度それが始まってしまうとパニックがパニックを呼び、人々は自分の持っている株をわれ先にと売り始める。どんなに冷静で知的な人間も目の前で株価が下がり続ければ大衆の中に飛び込んで同じように行動せざるを得ない。ルールはあまりに単純で、つまり持株を処分することを躊躇した人間ほど取り残されて気がついたときには取り返しのつかない大損を抱えてしまう。いったいそこで何が起きているのか、そういうことを理解する時間など誰にも与えられていない。ただ、茨丞のように暴落に賭けていた人間たちだけがその様子を余裕で眺めていられる。茨丞は猛烈な勢いで崩れていく大企業の株価を横目に心当たりのあるいくつかのケースについて調べようとキーボードを叩き、そしてある指標が大きく変動しているのを見つけてこらえきれなくなり笑い出す。日本国債のCDSスプレッドが急激に跳ね上がっていた。つまり日本のデフォルトに対する保険商品の価格上昇が株価暴落と同じタイミングで起きていたということで、株価の暴落が日本財政破綻の恐怖の急速な増大を原因とするという意味だ。

引き続き茨丞はこの現象の背後を探ったが何がそのきっかけだったのかということはいまちはっきりとはしない、しかしここ最近いくつかの証券会社やシンクタンクから競うように日本財政破綻についてのレポートが飛び交い、株価暴落の当日には海外の有力経済情報紙でもそれについての特集記事が組まれたりしている。ごく近い未来のこと、もしかするとほんの数年前、日

本の貿易収支の赤字が常態化しこれまで考えられていたよりもずっと早く経常収支が悪化、増え続ける借金はGDP比で世界一位にまで達し、なお増大する国の負担を解決するのに必要な改革を行う能力が政治、そして何より社会そのものにおいて致命的なほど欠如。既得権益享受者はそれを守ることに執心して国が破滅すれば自分も巻き添えになるというのに危機感は何も、既得権益すら持たない人々も事態の深刻さを理解していない。決して有能な人間が少ないわけではないが、陰湿な社会システムによって行動を阻止され翼をもがれた鳥のように地べたでうめくことしかできない。よって国内の人々は目の前の悲惨を黙って見つめるだけ。結果として日本はゆっくりとした衰退を選択することになり投資対象としてはもはや魅力がない。しかもその衰退は突然死を引き起こす可能性もある。IMFにも欧米にも中国にも日本を救うことなどできはしない。おりからのインフレ進行も重なり国債の価値が下落、まずは海外投資家、次に国内ヘッジファンドと個人投資家、最後に貯蓄率急落と経済情勢悪化と規制強化で圧迫される国内金融機関が損失に絶えられず国債を処分し始め、それがドミノ倒しのように売りを加速する、そこに待っているのはほぼ確実な国家財政の破滅だ、などなど。もしかするとそうやって蓄積し続けた不安もしくは恐怖がこの瞬間にまるで示し合わせたかのように顕現してパニックを引き起こしたのかもしれない。いつか起こると誰もが考えているがそれがいつ起こるのかは誰にも分からない、徐々に意識に上る何かのように、ある日突然閾値に達して、現れたその時にはすでに誰にも手に負えないような怪物になっている。ネットなどでは海外の著名なヘッジファンドや金融機関が日本国債を投げ売りし始めるという噂が病原菌のように感染して広がっている。土日の間じゅう苺丞は興奮状態、月曜に相場が始まるのが待ち遠しい。証券会社のサイトにアクセスして何度も自分の口座を確認し、ついに大きな利益の乗り始めた自分の保有するポジションを何度も眺めては悦々とほくそ笑む。いったん暴落が始まればいったいどこまで下がるのそれは誰にも知れない。ナラカアビス、ぱっくりと口を開けて、のぞき込んだ者のまなこは暗い闇の底がどれくらいの深さにあるのか捉えることかなわず目眩目眩するのみ。苺丞はもう多分十分に勝利を手中に収めていたが、これ以上ない貪欲さを吐き出すようにして週明けの相場でさらに空売りをぶつける株を物色する。苺丞は待ち続けたチャンスをことごとく生かすつくして、市場から搾り取れるだけの利益を搾り取ってやろうとひたすらにひたすらに準備を整え集中力を高め勝負の開始を待ち構える。

月曜日の朝、パソコンを立ち上げた苺丞はそこに広がる異様なムード感じ取る。多くの銘柄が大量の売り注文が殺到していることを示す特売り気配で固まり、その売り注文は減ることなく増え続け買い注文はその異様さに怖気付いたかのようにその数を減らしていく。毎朝ニュースで報告される外国人投資家の売買株数は記録的な規模の売り越しとなっており、利益に貪欲で相場の売買金額の七割近くを占める外国人投資家が大挙して売りに押し寄せれば国内の投資家など為す術もない。相場が始まると同時に株価は大暴落、膨れ上がっていく利益を見つめながらも苺丞はさらなる空売りを資金の限界が許すまで容赦なく叩き込む。日本株にとって運が悪かったのは暴落の直前までずっと上昇を続けていたことで、そのことが猛烈なぶん投げ売りを誘うはめになっていた。燎原の炎、混乱は広がり、苺丞が仕込んだ空売りは躊躇して逃げ遅れた人々から利益を加速度的にむしり取っていく。とことん下がった株価は明らかに割安になりときおり反発して上昇する動きを見せたが、しかしそこに雲禍蠅のごとく売り注文が群がって来てかすかな希望を巨

大な鉄槌で粉砕するかのように株価を叩き落とす。ナラカアビス、ぱっくりと口を開けて、のぞき込んだ者のまなこは暗い闇の底がどれくらいの深さにあるのか捉えることかなわず目眩目眩するのみ。こんなひどい暴落を見たのは始めてで、茨丞はいったいどれほどの人が大金を失い、あるいは路頭に迷い、あるいは自殺に追い込まれるのだろうと考えてみるがそれも長くは続かない。相場は勝手気ままに激しい変動を続けパソコンの画面で株価が上下するだけ、その向こうにいる無数の投資家の喜怒哀楽など知るよしもない。金は人間に無関心だ。だから市場に感情は持ち込めない。

開けて火曜日、それでも暴落の勢いは続く。水曜日にはじわり反発したが、木曜日にはさらに容赦ない売りが殺到し下落のスピードを増していく。日本国債にはろくな買い手が見つらず利回りが跳ね上がりその価値は暴下して止まらない。テレビ新聞インターネット、かしこもどこも日本財政破綻危機のニュースで埋め尽くされ怯えふためく人々の声が乱響、茨丞は普段は見ないテレビを点けてその様子を眺めてみる。悲観楽観、双方の立場のエコノミストたちが画面上で議論を行い、周囲の出演タレント一同は緊迫したまじめな顔でその様子をじっと見つめ、その中の一人が、難しい議論はもういいよ！ 僕らが知りたいのは大丈夫かそうじゃないかというシンプルな結論だけなんです！ と大声でエコノミストたちに怒鳴り観客から喝采を浴びている。苦笑まじりに困惑するエコノミストたちの中で楽観派の一人が口を開き、日本の経済不調は一時的で経済大国に見合う能力を持っているという本質的な部分は変わっていません、昔の日本のような精神に立ち返り国民一丸となって頑張れば八十年代の繁栄ジャパンアズナンバーワンの再来も夢ではないでしょう、と請け合う。画面の隅では、日本沈没！ という真っ赤なテロップが光っていた。

勝手に沈め。

茨丞はテレビを消して吐き捨てる。

かつての日本などもうどこにもなくて、今までみんなが知っていた日本とこれからの日本は全く別のものになるかもしれない。先のことなどこのエコノミストたちにも分からないし自分にもそして誰にも分からない。だが日本が沈むなら勝手に沈めばいい、俺は俺で勝手に生き残る。

そう呟きながら茨丞は再びパソコンの画面を見つめなおす、元手資金に限界までレバレッジをかけたために利益は異常なほど膨積って口座残高は最初の一千万円など問題にならないくらいの金額になっている。茨丞はなおも下落し続ける株価を見つめながら空売りした株を買い戻して利益を確定させる瞬間を待つ。人々が今どの程度パニックに陥っているのか、あるいはこれからそれがどの程度悪化するのか、茨丞はそのことを冷静に判断しようとする。人々の恐怖がピークに達する瞬間、それが大暴落のクライマックスだ。

結局株価の暴落が続いたのは二週間、絶妙のタイミングで空売りの買い戻しを入れて利益を確定させた茨丞は自分でも拍子抜けしてしまうくらいの大金を手に入れていた。株価の下落は止まっても社会は混乱したまま人々は血相変えて右往左往裏返り表返り。想像だにしていなかった事態に多くの人々が免疫を持たず不安に耐えられない、金融システムの崩壊、会社のドミノ倒産、大量の失業者、治安の悪化、年金を失い路頭に迷う高齢者たち、まだ実際に破綻したわけでもないのに極端な悲観論が蔓延している。だが茨丞は落ち着いて徐々に横ばい基調を見せ始めた株価を見つめながら日本が破綻するとしてもそれはもう少し先の話だろうと考え、しかし同時に自分が稼いだ大金を上手く分散投資してリスク回避するための準備を始める。茨丞は生き残るつもりでいる、もう借金まみれで地べたを這いつくばるのはごめんだし、経済が衰退すれば必ずいくらかの人々が淘汰されていく。市場の本質は生存競争で、それが拡大しているときはより多くの人々を養い生活を豊かにするが、ひとたび停滞縮小逆回転を始めれば無慈悲あるいは機械的に人間を切り捨て始める。二十世紀の経済拡大の中で設計されたまま硬直したこの社会はその縮小を前提とはしておらず、したがってその残酷を止める力はない。だから茨丞は人間には全く無関心に駆動する市場にその身を投じて勝利しなければならない、そして今の茨丞にはそれを可能にするだけの資金と自信が備わっている。

茨丞はまず瑠慄に借金を返そうと思い久しぶりに食事に誘う。予約を入れたレストランはそこそこ人気の店だったが国家転覆の危機に人々は自粛ムード、客足は遠のいているようですんなり席を確保できた。電話で連絡して大金を手に入れたことを伝えたときはとても喜んでいたのだが当日レストランに現れてみると瑠慄はどうも浮かない顔をしている。借金に利子を付けて返すと茨丞が言えば瑠慄は自分が貸した分だけで充分と興ざめ気味に答え、会話はいまいち盛り上がりず。メインディッシュの鴨肉をローストした料理が来たとき、瑠慄はその肉をナイフで一刀両断真っ二つにすると意を決したように顔を上げて茨丞を見る。

ねえ。

何。

ずっと考えてたんだけど。

身構える茨丞、あまり良い話が聞けそうにないのは明らかで、しかもだいたいどういう話なのか想像ができるくらいに分かりやすい態度を瑠慄は示している。

茨丞はこの先もずっとその生活続けるつもりなんでしょ？

そうだよ。前にも言ったけどやっぱり俺にはこれしかないって思うし。金があってもなくてもそれは変わらないよ。

それでやっていけるの？ 今回は成功だったけど、これからもそれが本当に続くのかな。

保証はないね。バクチやってんのは違うけど、それでも半分以上は運しだいみたいなところはある。でもそれはどんな仕事だって同じじゃないのか？ 一つの会社に勤めるってことはその会社が潰れないってことに賭けるわけだし、自分の腕一つで生きようとする人間でもその能力が必要とされなくなればお終い、今や公務員だって国が財政破綻すればどこまで身分保障されるか

分かったもんじゃない。

でも茨丞の仕事は特にそうでしょ。

確かに。でもどんな生き方も不確実性と隣り合わせなことに変りないんだし、むしろ俺はそこにとことん向きあってるだけ健全とも言える。

他の仕事してる人たちはそこから放り出されたときすごく弱いのかもかもしれないけど、そうなる確率も低いよ。それに、茨丞はもう一回借金しなきゃいけない状態に追い込まれたら、今度こそどうなるか分からない。

俺は何とかするつもりだよ、そうならないように、あるいはもしそうなってもどうにかする。どうやって？

また借金すればいい。何度でも再起してやるよ。

その言葉を聞いて、瑠慄の表情は暗い。ナイフを皿の上に置いて目を閉じ、また開き、机の上、どこか定まらない点々を見つめる。

私はもう貸さないよ。

だしぬけに言った瑠慄の語気は強い。声はどこか脅迫めいて茨丞を突き放し、どんな返し言葉も拒絶するように口もとを固く結んで冷たい鋼壁のようにじっとして動かない。茨丞は思わず黙ってしまい何と答えるかを上手く考えることができない、今まで迷惑をかけたと謝ろうかと考えてみるがどうにも適当なふうでない気がする。

ごめんね。

逆に瑠慄のほうからその言葉が出、緊張った茨丞を安心させようとしているのか愛嬌あるしぐさで皿の上の料理を口に運んで軽く微笑む。

でも今まで茨丞にお金貸してる間、ずっと思ってたんだよね。やっぱり最初に頼まれたとき、心を鬼にして断っとくべきだったなって。借りてるほうもしんどいのかもだけど貸してるほうもけっこうつらいんだよ。

それは、分かるよ。きっとそうだろうと思う。

茨丞は申し訳なさそうに頷いて、もしかしたら借りてる人間より貸してる人間のほうが嫌なもんかもしれないな、とひとり言のように呟く。

なんか余計に心配しちゃうんだよね。そんな心配なんか何にもならないしだけど、自分も一緒になって借金してるような気持ちになるっていうかさ。気が気じゃないの、ときどき。仕事にも集中できなくなるし、どこにもぶつけようのないイライラがわいてきて、でもどうしようもないから、結局すっごい疲れるんだ。そんな日は何にもしてなくても、というか何にもできなくて、それなのに終わってみるとぐったりしてる。

ごめん。

今度は茨丞のほうからその言葉が出、表情の曇った瑠慄をなごませようと愛嬌あるしぐさで皿の上の料理を口に運んで軽く微笑んでみる。しかしほとんど効果はなくて、瑠慄は沈んだ顔になってうっすら目に涙をためているように見える。

ねえ茨丞、……何ていうかさ。

ん？

別れてみない？

会話の流れと瑠慄の態度からそういう話が出るかもしれないと察していたものの、いざ話が出ると茨丞は多なり少なり動揺してしまいそれをごまかそうとテーブルの上のワイングラスをつかんで慌々と飲み込む。茨丞はいったん落ち着いたかったものの、我慢できない様子の瑠慄はすぐに続きを話し始める。

別に茨丞のことが嫌になったって言うんじゃないでさ、ただ単に疲れちゃったんだよね。それに前にも言ったけど玲がこれから大きくなってくれば心配しないといけないこと、もっと増えるだろうし。茨丞は離れて暮らしてるからそんなこと思わないかもだけど、私はいつも一緒にいるからそれをすごく感じるんだよね。これから世の中がどうなるのか分かんないから自分の生活が大丈夫なのかとかも心配しないといけないし、二人分も三人分も心配しなきゃいけないって、ちょっとつらいなっていうかさ。

俺のことは心配いらないよ。

保証はない、ってさっき言ってたじゃない。

まあ、そうだけど。でも瑠慄に借金を頼むつもりはもうないよ。

本当にそう言い切れる？ またお金がなくなって、もう誰も貸してくれる人もいなくて、でも俺にはこれしかないっていうものをあきらめられなかったら？

まあ確かに人間が本当に追い詰められたとき何考えるかなんて分からないけどさ、もし俺がまた頼みに行くようなことがあれば瑠慄は借金を断ってくれよ。俺はそれを恨んだりしない、それは絶対約束する。

ていうかね、茨丞だけの問題じゃない。私もついつい貸してしまいそうな気がするの。もしかしたら頼まれもしないのに自分のほうから手をさしのべたりして。そうなったら茨丞もそのお金を受け取るかもしれないでしょ？

受け取らない、と宣言したいところだけど。ひょっとしたらそうなる可能性があるってことは否定できない。何しろ追い詰められてるから。

すっごい正直。

そこでやっと瑠慄は表情を崩して笑う。

格好つけてそれは絶対ないって約束しても無意味だからな。

そうだね、私も約束できない。だから一回別れちゃったほうがいいのかなんて。これからまた今までみたいに、今まで以上に、疲れてしまうようなことがあるかもしれないなんて思いながらやっていくのって嫌だもん。恋人でも夫婦でもない関係って私には性に合ってたし、それはそれで良かったんだけど。

そうか。

口の中、音にならない声で茨丞は繰り返す、そうか。何か言うべき言葉の一つや二つでもあるだろうと考えるがそれが瑠慄をわずらわすようなことになって欲しくないと思い茨丞はそれを止める。今度は俺が金を貸すよとか俺もその関係は気に入ってたとか言おうかと思ったがそぐわない気がしてやはりそれも止める。

大丈夫なのか？

ようやくそんな言葉が出る。それもそぐわない感じで、茨丞は自分で言ったくせに変にはにかんで溜慄から目をそらす。

今まで自分が心配される立場だったのに、小金持ちになった瞬間にずいぶん立派になったじゃない。

溜慄はそう言って笑う。

まあその通りだけど、溜慄も言ってたようにこれから世の中どうなるか分かんないし。

大丈夫！ .....かな？ でも覚悟決めてるし、何とかするよ。

楽観的だな。

そう、楽観的。必死だけど、楽観的なもの。

二人はすっかりなごんだ気分になって、どちらからともなくテーブルに置きっぱなしになっていた料理にフォークをつけ始める。

金があるってのはいいな。

突然に茨丞が呟く。得心ない顔の溜慄、首をかしげながら紅梅色のソースがからんだ鴨肉をばくつく。

いや、この料理、冷めても充分美味いだろ。やっぱ良いレストランだからかなと思ってさ。ついこの間まではこんな所に来ることなんて想像もできなかったし。

あきれた、もう金持ちになった気でのいるの？ いつなくなるか分からないような危なっかしい金なのに。

そんなんじゃないって。ただ気軽に美味しいもんが食えるってのは良いことだなと思ってさ。金がありゃ良いってもんじゃないんだらうけど、でも金がなかったときのことを考えると、これはすごいことだなんていうか、そんな感じがして。

そりゃ今まで食べてた物とは雲泥の差だらうけど。

俺は株なんかやってたくせに金持ちになって良い暮らしをしたいとかそういう考えがなくてさ、でも、もっと美味しいもん食うとかもっと楽しいことができるとか、そんなことのために金稼ぐのもありなんじゃないかなっていうか。

欲が出てきたってことね。

まあ金なんかなきゃないでもいいんだらうけど。

何それ。

何だらうな。

小さなバスケットの中から手に取ったパンにバターを付けて口に入れ茨丞が笑う。得心ない顔の溜慄、同じようにパンを手に取って首をかしげる。

美味しいなあ、つくづく。俺がもうひと稼ぎしたあかつきにはまたこの店に来ようぜ。

特に何の他意もなく茨丞は提案する。パンを口にほおぼっていた溜慄は言葉にはせずその提案に笑ってうなずきを返している。



上手いこと金を稼いだ旨を伝え、茨丞が借金の返済を申し出ると、舛治は自分の家に来てくれと答える。何か理由でもあるのかと尋ねてみるが特にそんなものはないと舛治は言う。かたや断る理由もあるかといえ、特にそんなものはないので茨丞は舛治の家まで行くと約束した。すでに消費者金融から借りた金は返した茨丞、舛治本人から借りたことになっている残りの一千万円をせっかくなので直接現金で渡してやろうと千枚の万札を用意する。

日曜の昼も下がり下っていく時刻、舛治のマンションへの道の程はのどかなもので、駅を出て川沿いを遊歩しているとツバメなど頭上から現れひょうと滑空して翻りまた昇って行く。世の中は国難であるなどと騒ぎ立てているのに我ながら良い気なものだと思いつつ、しかしその危機の前は自分一人が苦難にもがいていたわけでそれもまた奇妙なめぐり合わせだ。そんなことを考えながら茨丞は太陽を斜断して閃翔するツバメの影を仰いでいる。

マンションの部屋に着いた茨丞を出迎えた舛治は寝起きのような気の抜けた顔で無精ひげを生やしている、仕事が休みなので昨日から剃っていないらしい。いつもと違う雰囲気だと感じながら茨丞は全く飾り気ない殺風景な部屋に入り床に座ると勧められるままに缶ビールを手に取りそれをあおる。マンションはまだ新しいのか部屋の壁が異様に真白くうるさいくらいに煌々としている。茨丞は早々にバッグから一千万円の札束を取り出して目の前のテーブル、舛治の目の前に置く。

すごいだろ、一千万円なんて持ち歩くの始めてだったし緊張したぜ。

札束を指で弾き茨丞が笑う。舛治は特に関心を持たない様子で茨丞の正面に座ったままじっと札束を、まるで始めて金を見たのでそれが何なのか理解出来ないともいうような風に観察している。

だいぶ儲かったのか？

ぼつり、舛治の声は小さいもので茨丞は確認のために聞き返さなければならない。舛治はひとつ咳払いして同じ言葉を繰り返す。

だいぶ儲かったのか？

え、ああ。いちおう借金生活から抜け出せる見通しが立つには充分なくらいの稼ぎだったな。

無言でうなづく舛治、テーブルの札束を手にとって眺め、それをどこかにしまうのかと茨丞が見ていると、結局再びテーブルの上の同じ位置に置く。

しかし、しぶといなお前は。あの大学生の時の暴落も、今回の暴落も、しっかりふところに金を貯め込んで生き延びてやがる。

まあ今回は運が良かった部分も大きいよ。何か嫌な予感がしてたのは本当だけど、自分が行動を起こしたタイミングとか暴落の規模とか、ここまで大当たりすることなんてこの先二度とないんじゃないかってくらいのもんだった。実際、リーマンショックの時は運が悪かったのと判断が遅かったのでひどい目に会ったからな。

運でも何でも良い、お前が勝負に勝ったってことだけが事実だ。

しみじみ味わうように言うと、舛治は自分も缶ビールを開けて乾杯のしぐさを小さく一つ。

おめでとう。

妙に素直な言葉に茨丞は怪訝な心持ちになるが舛治に小さく同じ乾杯のしぐさを返す。

今日はいつもと感じが違うな、そんな感じがする。

茨丞に言われて舛治は力の入らないかすかな笑みを見せる。

何か気分が良いんだ。お前が勝負に勝ったことが変に嬉しい。

そりゃどうも。

答えて茨丞は舛治の顔をうかがう。大学を出てからずいぶんスレて別人のようになっていたが、今日は普段の不気味な卑屈さが消えて学生時代の面影すらのぞく。

実はな、茨丞。

ん？

俺な、お前がこの勝負に負ければ良いって思ってだんだ、正直。

おいおい、何だよそれ。

驚いた茨丞の目の前、舛治は同じ笑みを残したままうなずく。

自分でもよく分かんねえ。いつまでも完済の見込みが立たない借金を何とか返してもらいたかったのも本当だけどな、それよりはるかに強く望んでたのは、大きな借金で怖気付いたお前が冷静な判断ができなくなって株で大失敗するってことだったんだ。

そりゃ変だろ、だってお前、借金が返って来なかったんだぜ？ そんなことになってたら。

それでも良い、そう思った。自分でもおかしい話だと分かってるけどな。

何でだ？

実際のところ、俺自身納得いく理由は持ってないのさ。でも、もしかしたらお前に嫉妬してたのかも分からん。

嫉妬？ お前が俺のどこに嫉妬すんだよ。俺は職歴も学歴もない無職ニートまがいで借金まみれのバクチ打ちだったんだぞ？ ある意味最低じゃないか。

でも自由だ。俺からすると。職はあってもやりたくないことをやり服従したくもない人間に服従して生活のためにマゾヒスト決め込んでるような人間からすると、苦境にあったとしても自分のやりたいように無茶して生きてるお前が心の底ではどこかうらやましいっていうふうに思ってしまうのさ。ありきたりな悩みだけどな、ありきたりってことはそれだけ多くの人にとって解決できないやっかいな問題ってことでもある。

そんな良いもんじゃねえよ、俺の生活は。どっちかっていうと追い込まれてそうだったって感じだったしな。

でもお前は勝負し続けてただろ。

勝負せざるを得なかったから。

そしてついに勝った。

さっきも言ったけど、それは運が良かったからだ。

どっちでもいい、俺もさっき言ったけど、お前が勝ったってことだけが事実だ。そしてお前が大金を手にした今、その嫉妬心がもうどうでも良いものになった。確か俺はお前にその生活をあきらめることを勧めてたけどな、本当は俺は俺自身にこのくだらない嫉妬をあきらめさせたかったんだと思うぜ。他人を妬むっていうのはすごく疲れることなのさ、でもみんなそれをさらなる妬みでごまかさないと自分のみじめさに耐えられない。心に妙な薬を打ち続けるようなもので、

本当はもうぼろぼろで無意味な感情の炎に焼かれることには疲れ果ててるのに、それでも同じことを繰り返さないと耐えられないんだ。結局自分が何をやっても自由な人間のほうが強いってことは分かってるのにな。

いや、俺は大失敗してた可能性もあるわけだし。妬んでるほうが楽なのは本当のことだろうと思うけど。

お前がもし勝負に負けてても、お前じゃない別の誰かが勝利を手にすることになる。その勝利は絶対に妬みを持つ人間のものではないんだ。

茨丞はのみさしの缶を口もとに当てて考え込む、自分のやっていることをそんなふうにとらえたことはなかったし、ましてや舩治がそんな考えで自分のことを見ているとは思ってもみなかった。今日の舩治は一度も肌を粟立たせるような卑屈な笑いをしない。終始かすかな笑みを浮かべ、透き通ったような目で景色を見ている。逆にそのすがすがしさが気味の悪いくらい。部屋の外ではゆっくりと日が暮れ始め、赤らんだ光が差し込み部屋の白い壁を斜めに切り裂いて延びている、その様は皮膚を剥かれた地獄が血を流しているかのよう。

今はどう思ってる？

何が？

茨丞の質問に舩治は首をかしげる。

つまり、俺が勝って良かったと思ってるのか、悪かったと思ってるのか。

どうだろうな。今までよりは良い気分だ。でもお前が負けてたらもっと良い気分だったのかもしれない。それはよりみじめな気分の良さだけだな。

そうか。

俺が自分で納得いかないような嫉妬心を持ってたのは、きっとお前が俺に近すぎる存在だったからだよ。大学の時は友達だったし、しかも一緒に株を始めて、その命運を分けたのはたった一回のコイントスだ。もしかしたら俺とお前は逆の立場になってたかもしれないってことすら考えるんだ。

どうかな。俺は自分が株で失敗してたとしてもまともに職を得られたとは思わないよ。自分が社会に適応できる資質を備えているという感じがまるでない。

社会に適応するなんてその気になれば簡単に過ぎることだよ。お前は強情だからそう思えないだけだ。

それには何も答えない茨丞、またのみさしの缶を口に当てて考え込む。そこで会話は途切れ、互いに何も言い出さずに呆けたように沈考して動かない。重たい時間がびっこを引くようにぞそ、ぞそ、と通り過ぎていったが、そのうち取り繕うように舩治が口を開く。

いや、もう良いんだ。俺はやっとそこから逃れることができた。もうそれについて何も考える必要はない。

そうだな、それが一番良いことだ。

何が良いのか本当はよく分からなかったが、茨丞は取りあえずそういう言葉を返して缶ビールを飲み干す。しだいに日は暮れて来て、赤らんだ光が差し込み部屋の白い壁を斜めに切り裂いて延びている、その様は皮膚を剥かれた地獄が血を流しているかのよう。部屋を満たす静かで冷た

い空気に身震いして、茨丞はそろそろ帰ると舩治に伝えて立ち上がる。

まあ、そのうちまた飲みにも行こうや。

茨丞はそう言ったが、実際にはそういう気持ちではない。前に思っていた以上に、もう舩治には会いたくないような気がしている。

そうだな。

舩治は、あのかすかで力のない笑みを浮かべて部屋を出て行く茨丞の背中を見ている。

部屋に一人、ぼつねんとして、舩治は密かにしまっていたロープを取り出して来て天井から吊り下げてみる。垂れ下がった輪っかに、椅子に上って首を通そうとして背伸びする。少し位置が高くて首は上手く通らない、我ながら何という馬鹿な事を考えているのだろうと床へ降りて自嘲する。自分が茨丞に一千万円を融通するために会社の審査をすり抜けようと資料を偽造したことはたぶんそのうちバレてしまうし、仕事もクビになる。しかしだからといってそれがこんなに思いつめるようなことのはずはない。茨丞は勝利を手にし、気分は楽になったはず、しかし突然干上がった平原に洪水が押し寄せるように、今やその気分はもっと深刻で、そして虚無に襲われて何もできない。舩治はそんなことを考えつつ、ふと、机の上、茨丞が持ってきた一千万円の札束が目止まる。じっとそれを見つめ、何か考えを反芻して、とうとうその札束をつかむと椅子の真ん中へと置いてみる。丁度良い高さだと舩治は思う。そしてまた椅子へと上り、その札束を踏み台にして首の位置を高くすると、ちょうど目の前にロープの輪っかがあった。舩治は自嘲する、二度と三度と打ち消してはこみ上げてくる笑いが、むなしく部屋の中に吸い込まれて消えていく。日はいよいよ暮れて、輪っかの向こうでは部屋の壁に真っ赤な光が差し込みその白を斜めに切り裂いて延びている、その様は皮膚を剥かれた地獄が血を流しているかのよう。それが幻覚のような気がして、舩治は固く目を閉じて十秒数えてからまた目を開く。輪っかの向こうでは部屋の壁に真っ赤な光が差し込みその白を斜めに切り裂いて延びている、その様は皮膚を剥かれた地獄が血を流しているかのよう。舩治は再び固く目を閉じて輪っかに首を通すと、踏み台にしていた札束を思い切り蹴り飛ばす。

か、び。

玲はその言葉を言い間違える。

かび？

苺丞は何のことだかよく分かっていたがわざとオウム返しをする。

ぎゃみ。

玲はその言葉を言い間違える。ただし、わざと。

ぎゃみ？

けけみ。

玲はその言葉を言い間違えるために言い間違える。何度でも、言い間違えを試してみる、言い間違えるための言い間違いが繰り返される。玲は以前と全く同じように本を一つ抜き取ってそのページをつまみばさばさと揺らして見せる。

紙？

苺丞はやはり分かっているがわざと訊く、玲はばさばさ揺らす。つまり紙を所望しているということだ。用事があって出かけるという溜慄に再び頼まれて、この招かれざる野良猫を家に預かり苺丞は複雑な気分で世話している。紙飛行機が大のお気に入りなのか、また苺丞から紙をもらってそれを作りたいがっているらしい。

今日は本はダメだな。この前掃除していない本は全部捨てたから、もう必要な本しかない。

苺丞は笑って首を横に振るが玲はいまいち理解しておらず手に持った本をばさばさ揺らす。苺丞はもう一度首を横に振る、玲はばさばさ揺らす。

心配すんな。今日は金があるんだ。好きなだけ折り紙買ってやるからそれで作るといい。

苺丞はできるだけやさしく玲の手から本を取り上げたが、玲は不満そうな顔で苺丞を見上げている。

ほれ。

苺丞は財布から一万円札を取り出して玲の鼻先でひらひらさせる。玲はそのお札を素早い動きでつかんで手に持ったかと思うとまじまじとそれを観察している。しかしまた不満気な顔で苺丞を見上げ何か欲しそうに手を伸ばしてくる。玲の求めるものがよく分からず苺丞が首をかしげていると玲はジャンプして苺丞の手から財布を奪い、そこから数枚のお札を抜き取る。

おい。

苺丞は慌ててその金を奪い返そうとするが、玲がとても満足そうな顔をしているのを見て手を止める。じっとその行動を観察する苺丞の目の前、玲はテープを取り出してきて数枚のお札を重ねて貼り付け始める。あ、と小さく苺丞は声を漏らしたがすでに遅い。お札はテープでべたべたになり、玲はそれをばさばさ揺らして笑う。半ばあきらめ顔、苺丞は後できれいにテープをはがせばいいかと考えながらため息をつく。そして玲はテープで貼り合わされほぼ正方形になったそのお札を今度は自分の正面に置いたかと思うと、ていねいに紙飛行機を折り始める。なるほど折り紙を買うなんていう用途にお札を使うよりもこうしたほうが早いなと苺丞は思わず笑ってしまう。でき上がった紙飛行機を見ると折り紙の技術はだいぶ上達したようで、玲が投げると部屋の中でまっすぐ飛んでいく。

すっかり上機嫌になった玲を見てどうやらしばらくは紙飛行機に子守をまかせられそうだと苺丞はキッチンへと移動しコーヒーを淹れることにする。やかんを持っていないので鍋で湯を沸かしながら、せっかく金が入ってきたのにこの部屋は相変わらず貧乏くさいままだなと見回し、今度の土日にでも何か買ってこようかとあれこれ欲しい物を考える。そしてちょうど湯が沸いたころ、隣の部屋から窓を開けるような音がする。玲が何かしているのかと、苺丞が火を止めて急いでそちらへ行くと玲はお札で作った紙飛行機を持ってベランダに立ち、じっと空を見つめている。

待て。

苺丞のその言葉と同時に、玲は紙飛行機を空へ向かって投げてしまう。あっけにと取られて怒る気にもならず、苺丞は風にあおられ舞い上がる紙飛行機を眺めている。

落ちるな！

玲は大きな声で紙飛行機に呼びかける。すぐに落ちてしまうかと苺丞は思っていたが、意外なほど長く紙飛行機は飛んでいた。必死で紙飛行機を応援している玲を見ながら、苺丞はだんたんとあの紙飛行機に落ちて欲しくないという気持ちになってくる。できるだけ長く、遠くへ飛んで行って欲しい。

落ちるな。

ずっとベランダに立ったままで、いつのまにか苺丞はそんな言葉を口に出している。